335.49
M494m
II

0026040000

0026040-000

335．49－M494m
(335.49－M494mII)

南満洲鉄道株式会社二十年略史

南満洲鉄道株式会社庶務部調査課・編

南満洲鉄道

1927

ADF

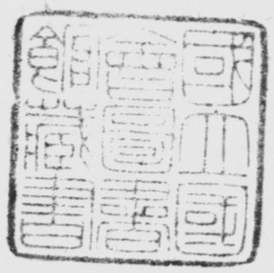
正	誤
九六頁八行	賠償の責任	賠償責任
一七八頁十二行	此美風	比美風
一八四頁四行	必要を生じ	必要生じ
一八八頁十一行	創立後	創後
二二五頁十六行	千圓（單位）	圓（單位）
二六九頁四行	作り	造り
二七八頁七行	第六節	第八節
二八六頁十五行	業務	事務
三〇六頁十四行	絡繹	駱繹
三二六頁十四行	廢す	廢し
三三一頁八行	執れも	孰れも
三三六頁八行	設置と共に	設置と共

東京都千代田區丸ノ内二ノ八神十二号館六号四一二室
芳澤中國記念事業財團
電話(28)四一〇八番

南滿洲鐵道株式會社二十年略史

335.48

335.48
M494m
II



335.49
M494m
II

国立国会
33.3.1
図書館

512514

南滿洲鐵道株式會社二十年略史ヲ編纂シテ之
ヲ上梓スルニ當リ二十週年記念日ニ於ケル式辭
ヲ錄シテ本書ノ序ト爲ス

昭和二年四月一日

南滿洲鐵道株式會社
社長 安廣伴一郎

式辭

不肖伴一郎乏ヲ南滿洲鐵道株式會社社長ニ承ケ職ニ居ルコト既ニ三歲本日ノ記念日ニ會シ諸君ト共ニ茲ニ本社開業二十周年ノ盛儀ヲ擧ケントス本職ノ光榮之ニ過クルモノアランヤ

回顧スレハ明治三十九年ノ秋時猶ホ兵馬倥傯ノ際始メテ本社ノ創立セラレテ以來本社ハ業務ノ組織社員ノ選擇配置等所有ル經營上ノ陣容ヲ整ヘンカ爲ニ約半歲ヲ費シ翌四十年四月一日ヲ以テ業務ヲ開始セリ當時我帝國ハ有史以來空前ノ大戰ヲ經テ國帑ヲ費消スルコト十幾億壯丁ヲ亡フコト幾萬國力方ニ疲憊ノ極ニ在リ具眼ノ士ト雖モ本社ノ前途ニ對シテ疑惧ノ念ヲ懷ク者內外共ニ尠カラサリシナリ同時ニ一方滿洲ノ實況ヲ窺ヘハ大戰ノ直後トハ言ヘ諸物一トシテ衰颯ノ狀態ナラサルハ莫ク到ル處陋巷隘衢ノ城市茅舍蓬戶ノ村落ニシテ百年以前ト異ナル所無ク更ニ革新ノ光景ヲ帶ヒテ生氣ノ潑溂タルモノアラス山野城郭滿

眸ノ風物悉ク黯澹トシテ人ヲシテ轉タ荒漠凄涼ノ感ヲ生セシメ愛親覺羅氏發祥ノ舊都タル奉天城内ノ如キモ沈寂汚雜破廟敗屋散在シ太宗定鼎ノ宮殿ト雖モ金碧剝蝕風雨打淋ノ痕著シク實ニ荒涼ヲ極ムルモノアリキ然ルニ春風秋雨星霜ヲ閲スルコト僅ニ二十年奉天城内ノ現狀ハ官衙銀行會社將タ富紳ノ高樓大厦櫛比林立シテ道路ノ縱橫街衢ノ整齊首善ノ大埠タル觀瞻ノ美ハ既ニ昔日ノ廢墟ノ俤ヲ一掃シタリ嘗ニ奉天城ト言ハス或ハ長春ノ如キ或ハ安東ノ如キ或ハ遼陽ノ如キ其他沿線各地到ル處皆顯著ナル發展ヲ遂ケ商務殷盛活氣橫溢之ヲ當時ニ比スレハ幾ト隔世ノ感ナクンハアラス

惟フニ上述ノ事實ソノ然ル所以ノ原因ヲ尋ヌレハ是レ或ハ最近ニ於ケル中國人士ノ覺醒ト相須ツテ彼等士民カ堅忍不撓ノ國民性ノ致セル所ナランモ之ヲ要スルニ是レ主トシテ本社カ此地ニ投資セシ鉅億ノ貲財ト共ニ爾來二十年間拮据經營心力ヲ傾注シテ文化ノ進展產業ノ發達ニ竭盡セシ努力ノ結果タルコトハ苟モ隻眼ヲ有スル者ノ辨識シ得ル所ニシテ內外人士ノ齊シク認ムル所ナリ

飜ツテ內ヲ顧ミレハ本社カ創立ノ當初ヨリ今日ノ狀態ニ至リシ其間ノ經過ハ決シテ簡短ノモノニテアラサリキ所謂羅馬ハ一日ニテ成ラス卽チ過去二十年間本社ノ辿リ來リシ徑路ヲ回視スレハ亦相當ノ艱險ニ遭遇シ來レルナリ之ヲ想ヘハ實ニ感慨無量ナリ夫レ水ヲ飮ンテ源ヲ思フハ人情當ニ然ルヘキコトトナス本社今日ノ隆運ヲ說ク者ハ過去ノ逆境ヲ知ラサルヘカラス蓋シ創立當初ニ在ツテハ資金ノ調達事業ノ繼承軍憲トノ交涉鐵路聯絡ニ關スル露淸兩國トノ折衝附屬地市街ノ建設敎育衞生各機關ノ設備廣軌改築旅館ノ經營等幾多ノ困厄四圍ニ蝟集スルアリ開業以降ト雖モ或ハ外交ニ惱ミ或ハ財政ニ苦ミ經營慘澹之ヲ處理スル當路者ノ苦心ハ其ノ事情ヲ知ル者ヲシテ危惧ノ餘窃ニ心膽ヲ寒カラシメシコトモアリ幸ニシテ創業當初ハ識見卓越機略ニ富ミ大事ニ處シ得ル拔群ノ英才勘カラス其後ノ幹部マタ經營其人有リ守成ノ業ニ當リテ思慮周密思操堅確更ニ之ト共ニ豐カナル天惠ト時運ノ佑助ト且又

社員諸君ノ忠實ナル努力奮勵ト內外官民ノ甚大ナル後援トヲ得テ總テノ艱難ニ勝チ迫害ト戰ヒテ基礎此ニ固ク功績此ニ顯ハレテ遂ニ今日ノ現況ニ達シ南滿洲鐵道株式會社ノ名ハ宇內ニ喧傳セラルルニ至レリ誰カ欣喜慶祝セサランヤ

然リト雖モ社業ノ前途ハ尙遼遠ナリソノ間必スシモ坦々タル平直一路ニ非サルヘク幾多ノ難局ニ遭遇スル事ヲ覺悟セサルヘカラス而シテ本社ノ使命ハ自ラ在ルアリ之ヲ遂行セサルヘカラス是レ實ニ本職カ就任以來自己ノ責任ニ鑑ミテ會社ノ寄託ニ副ハンコトヲ念ヒ業務ノ整頓緊肅社員ノ誠心勵精財力ノ節約善用ヲ高唱スル所以ナリ冀クハ諸君能ク本職意志ノ存スル所ヲ斟酌顧慮セラレ奮發激勵シテ各々心力ヲ自己ノ職責ニ盡シ常ニ行ヲ檢シ驕ヲ戒メ輕佻浮薄ノ行爲ヲ絕チテ質實剛健ノ精神ヲ養ヒ竝ニ自立滋殖ノ事ヲ忽ニセス以テ行動ニ束縛ヲ受ケス德義ノ毀損ヲ致スヲ防カンコトヲ夫レ衆志城ヲ爲シ衆腋裘ヲ成ス諸君ニシテ本職及僚友ト共ニ斯ノ志ヲ同クシ以テ鞏固ニ我社ノ基礎ヲ立テ一致結束邁進シテ勇往セハ夫レ何ソ我社事業ノ振張興隆セサルヲ憂ヘンヤ此クノ如クニシテ本社始メテ其ノ使命ヲ完フシ其ノ存在ノ意義ヲ現ハスヲ得テ滿蒙ノ文化ヲ啓發シ天與ノ資源ヲ開拓シ日支ノ邦交ヲ敦クシ世界ノ交通ヲ利シ以テ人類ノ福利ヲ增進シ文明ノ世運ニ寄與スヘクシテ夫ノ共存共榮ノ實效四海同仁ノ美德亦俱ニ此ニ立ツヘキナリ是レ實ニ諸君ト共ニ大ニ懷抱シテ遠ク期待スヘキ純眞洪大ノ目的理想ニ非スヤ本職ノ厚望シテ已マサル所ナリ茲ニ此ノ盛儀ニ臨ンテ欣歡ニ勝ヘス既往ヲ回顧シテ希望ヲ將來ニ寄セ聊カ鄙見ヲ敍シテ祝賀ノ微忱ヲ表ス

凡例

一　本書は過去二十年間に於ける會社各般の事業に關し其梗概を叙述して一般の參考に供せんとするものであるが廣汎に亘る資料抄約の必要上其精粗取捨排列竝に章句の整齊に遺憾の點が尠くない讀者之を諒とせられよ

一　書中の計數を大體大正十四年度又は同十五年九月としたのは年度半ばの數字は必ずしも確定せざるものが多いからである

一　度量衡に關するものは全部メートル法に準據すべきであるが記述の平易を趣旨としたのと機械類の形態能力の如き一種の名稱化せるものを換算表示するのは徒らに煩雜を增すに過ぎざるを慮り從來の單位に依つたものもある

一　本書中單に噸とあるは米噸であり瓲とあるはメトリック噸である但石炭の採掘數量賣買數量は英噸に依つてゐる是等外國度量衡と日本度量衡の概數を對照すれば左の如くである

哩	里	〇・四一
鎖	町	〇・一八
浬	町	一六・五八
呎	尺	一・〇〇五三

凡例

米噸……一、五一二斤
英噸……一、六八〇斤
瓲……一、六六六・七斤
瓩……一・六六七斤
封度……〇・七六斤
平方米……〇・三坪
立方米……〇・一六六步
立(リットル)……〇・五五四升

目次

第一編　會社の組織……一
第一章　會社の成立……一
第二章　定款(附株主總會)……一五
第三章　政府出資財産の引繼及引渡……二九
第四章　業務開始……三一
第五章　會社の監督……三二
　監督官廳……三二
　監理官……三四
第六章　重役……三五
第七章　會社の職制……四二
第八章　東京支社其他……四五
第九章　社員……四七

社員……四七
社員の養成……四九
職員資格試験……五一
社員表彰……五一
非役及待命……五二
第十章　社員の待遇及福祉施設……五三
第二編　會社の事業……六一
第一章　鐵道業……六一
第一節　鐵道……六一
(一)建設……六一
(二)改良……六二
(三)保存……六二
(四)木材防腐場……七一
(五)運輸……七二
第二節　倉庫……七三
(一)營業……七四
(二)火災保險……一〇四
第三節　工場……一〇六
(一)沙河口工場……一〇八
(二)遼陽工場……一〇九
第四節　旅館……一〇九
(一)大連ヤマトホテル……一一二
(二)星ケ浦ヤマトホテル……一一二
(三)旅順ヤマトホテル……一一三
(四)奉天ヤマトホテル……一一四
(五)長春ヤマトホテル……一一五
(六)附屬事業……一一五
(七)助成旅館……一一六
第五節　受託經營鐵道……一一七
(一)國有朝鮮鐵道……一一七
(二)吉長鐵道……一一八
……一二一

第六節　隣接鐵道……一二四
(一)東支鐵道……一二五
(二)四洮鐵道……一二六
(三)洮昂鐵道……一二八
(四)吉敦鐵道……一二九
(五)京奉鐵道……一二九
(六)奉海鐵道……一三〇
(七)金福鐵道……一三〇
(八)開拓汽車鐵道……一三一
第二章　海運業……一三二
第一節　上海航路……一三二
第二節　南支那沿岸航路……一三四
第三節　臨時航路……一三五
第三章　港灣及埠頭……一三六
第一節　築港……一三六

(一)地理的狀況……一三八
(二)工事用設備……一三八
(三)工事……一三九
第二節　埠頭……一四一
(一)大連埠頭……一四一
(二)其他の埠頭……一五二
第四章　鑛山業……一五八
第一節　撫順炭礦……一五八
(一)沿革……一五八
(二)地勢……一六〇
(三)地質……一六一
(四)炭層……一六二
(五)採炭……一六四
(六)施設……一八八
第二節　石炭及雜鑛物賣買……一九七
(一)總說……一九七

(二) 石炭……二〇一
(三) 銑鐵……二一一
(四) 雜鑛物……二一四
(五) 副生產物……二一六
(六) 成績……二一八
第五章 製鐵業（鞍山製鐵所）……二二二
第一節 總說……二二二
第二節 施設……二二二
第三節 職制及從事員……二二六
第四節 作業成績……二三一
第六章 工業……二三四
第一節 電氣工場……二四〇
(一) 第一發電所……二四〇
(二) 第二發電所……二四一
(三) 第三發電所……二四二
(四) 電燈電力電話……二四三
第二節 製造工場……二四四
(一) 硫酸工場……二四四
(二) 石炭乾餾工場……二四六
(三) 酸水素工場……二四八
(四) 鹽酸加里工場……二四九
第三節 頁岩油工業……二四九
第七章 產業施設……二五四
第一節 滿蒙の產業……二五四
第二節 農業……二五五
(一) 沿革……二五五
(二) 農事試驗場……二五六
(三) 農事試作場……二五九
(四) 優良種苗及種畜の養成……二六〇
(五) 農事助成……二六二
(六) 獸疫研究所……二六三

第三節　商工業……二六三
(一)沿革……二六三
(二)中央試驗所……二六四
(三)商品陳列所……二六五
(四)助長機關に對する助成……二六七
(五)出資に依る助成……二六八
(六)工業用炭……二七〇
第四節　鑛業……二七一
第五節　電氣、瓦斯及窯業施設……二七一
(一)沿革……二七二
(二)電氣作業所……二七二
(三)瓦斯作業所……二七四
(四)窯業工場……二七五
第六節　助成會社……二七八
第八章　地方施設……二八三
第一節　鐵道附屬地概說……二八三

第二節　地方經營……二八六
(一)組織……二八六
(二)經費……二八九
第三節　土地及建物……二九二
(一)土地……二九二
(二)建物……二九三
(三)土地及建物の貸付……二九四
第四節　市街經營……二九五
(一)概說……二九七
(二)各地施設……二九八
第五節　衞生施設……二九九
(一)診療……三一一
(二)保健……三一一
(三)防疫……三一四
(四)其他の施設……三一七
(五)衞生研究所……三一八

第六節　教育施設……三一九
(一)　初等教育……三一九
(二)　補習教育……三二三
(三)　中等教育……三二五
(四)　專門教育……三二六
(五)　幼兒保育……三二七
(六)　教育研究所……三二九
(七)　圖書館……三三〇
第七節　警備施設……三三一
(一)　消防……三三二
(二)　警戒……三三三
第九章　調査事業……三三六
第一節　調査機關の組織……三三六
第二節　調査課……三三七
第三節　東亞經濟調査局……三三九
第四節　哈爾濱事務所調査課……三四〇
第五節　地質調査所其他……三四〇
第六節　滿洲及朝鮮歷史地理調査……三四一
第三編　會社の會計……三四三
第一章　資金……三四三
第一節　資金收入……三四三
(一)　株金……三四三
(二)　社債……三四三
第二節　經理組織の改正……三四九
第三節　資金支出……三五四
(一)　豫算……三五四
(二)　興業費事業別決算……三五五
第二章　用品……三五五
第三章　營業收支竝利益處分……三六〇

挿入寫眞

一明治四十年頃の大連
一現在の大連
一本社全景
一創立當時の本社
一明治四十年頃の大連日本橋
一現在の大連日本橋
一廣軌車と狹軌車
一明治四十年頃の奉天驛
一現在の奉天驛
一明治四十年頃の長春驛
一現在の長春驛（本社線）
一同（東支線）
一鴨綠江鐵橋と流筏
一展望車

一寢臺車
一食堂車
一沙河口工場內の一部
一大連ヤマトホテル
一同（貴賓室）
一長春ヤマトホテル
一大連埠頭全景
一大連埠頭（其一）
一同（其二）待合所玄關
一同（其三）待合所內部
一埠頭倉庫豆粕混合保管
一大連埠頭大豆の野積
一戎克埠頭
一撫順炭礦（其一）露天掘
一同（其二）明治三十八年頃の採炭作業
一同（其三）東鄕坑

挿入寫眞

一鞍山製鐵所熔鑛爐
一鞍山製鐵所選鑛工場
一鞍山製鐵所冷却池
一公主嶺農事試驗場
一中央試驗所
一同　（試驗室）
一衞生試驗所大動物注射場
一油房の內部（搾油の景）
一同　（豆粕樽詰作業）
一四平街糧棧（雜穀問屋）
一大連圖書館書庫
一同　（閱覽室）
一大連日本橋圖書館
一獨身社宅（大連南山寮）
一長春共同事務所
一星ヶ浦全景

一夏家河子海濱
一奉天日露戰役戰勝記念碑
一奉天新市街
一長春新市街
一長春西公園
一湯崗子溫泉龍泉閣
一熊岳城溫泉
一大連醫院全景
一滿洲醫科大學（解剖室）
一同　（臨床教室）
一奉天醫院
一滿洲醫科大學標本室
一大連同壽醫院
一吉林東洋醫院
一奉天小學校
一蓋平公學堂

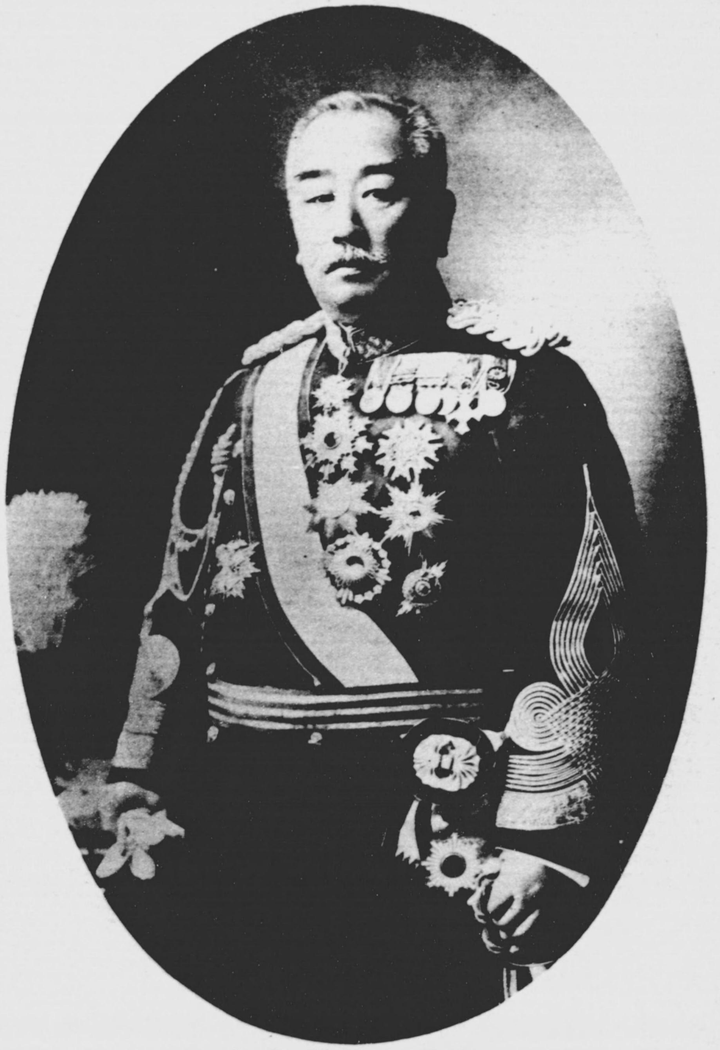
挿入寫眞

挿入圖表

一 營業收支累年比較
一 營業收支割合
一 與業費事業別割合
一 各驛旅客通過數量圖
一 各驛貨物通過數量圖
一 大連港及埠頭設備略圖 附日露戰役當時のダルニー港圖
一 附圖

長員委立設玉兒

寺内設立委員長



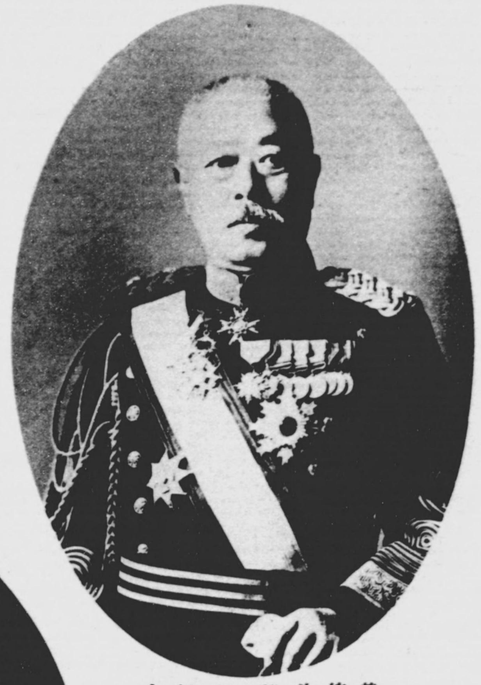
大島前關東都督

官長東關玉兒

初代總裁 後藤子爵

前總裁（公是）村中

前總裁村野



裁總前（郎次雄）村中

長事理前澤國

早川前社長

川村前社長

社長　安廣伴一郎

副社長　大平駒槌

望公歲大 事理

平海江入 事理

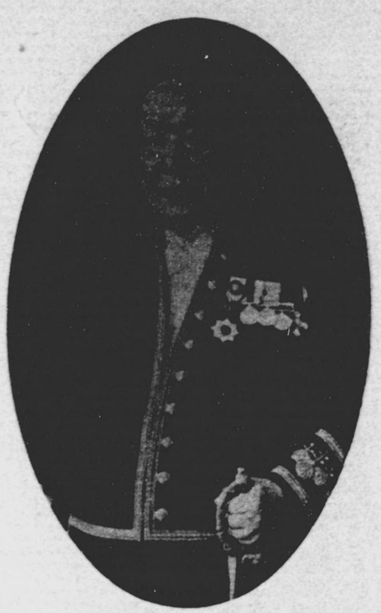
郎六俊 森 事理

理事安藤又三郎

理事岡本太虎郎

理事梅野實

監事　大橋新太郎



監事　馬越恭平

監事　原富太郎

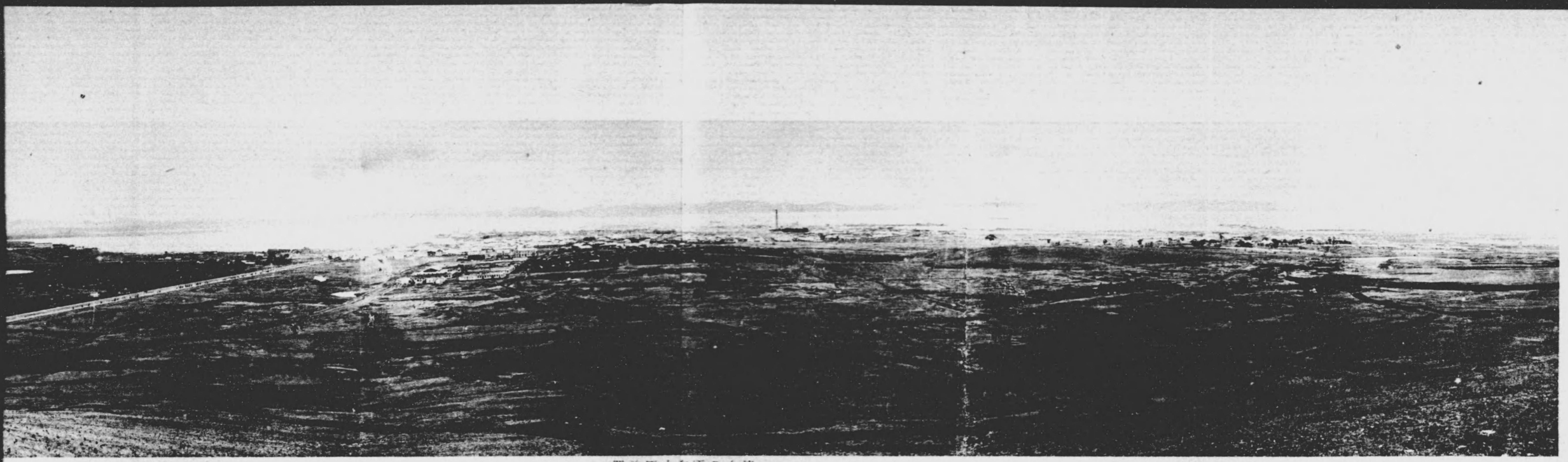
監事　永田仁助

平 恭 越 馬　事 監

郎 太 新 橋 大　事 監

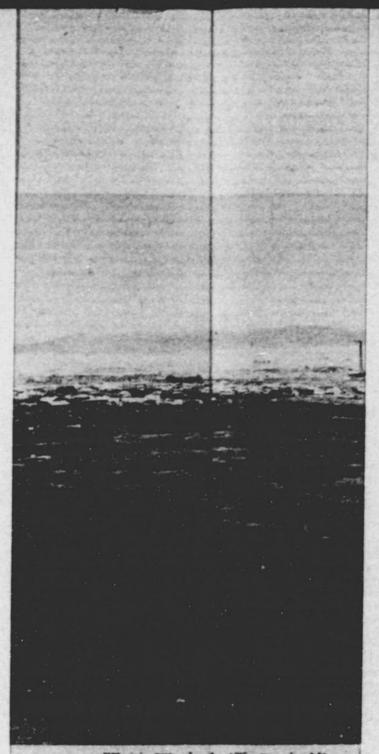
助 仁 田 永　事 監

郎 太 富　原　事 監

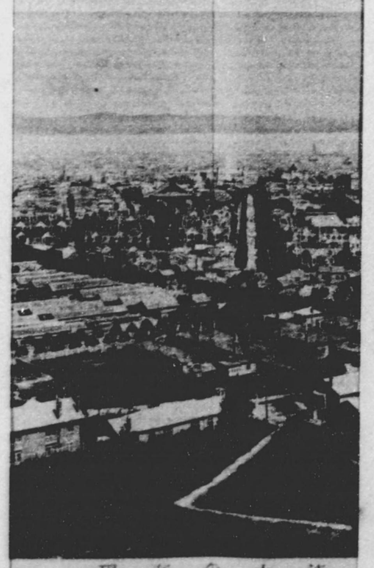


明治四十年頃の大連

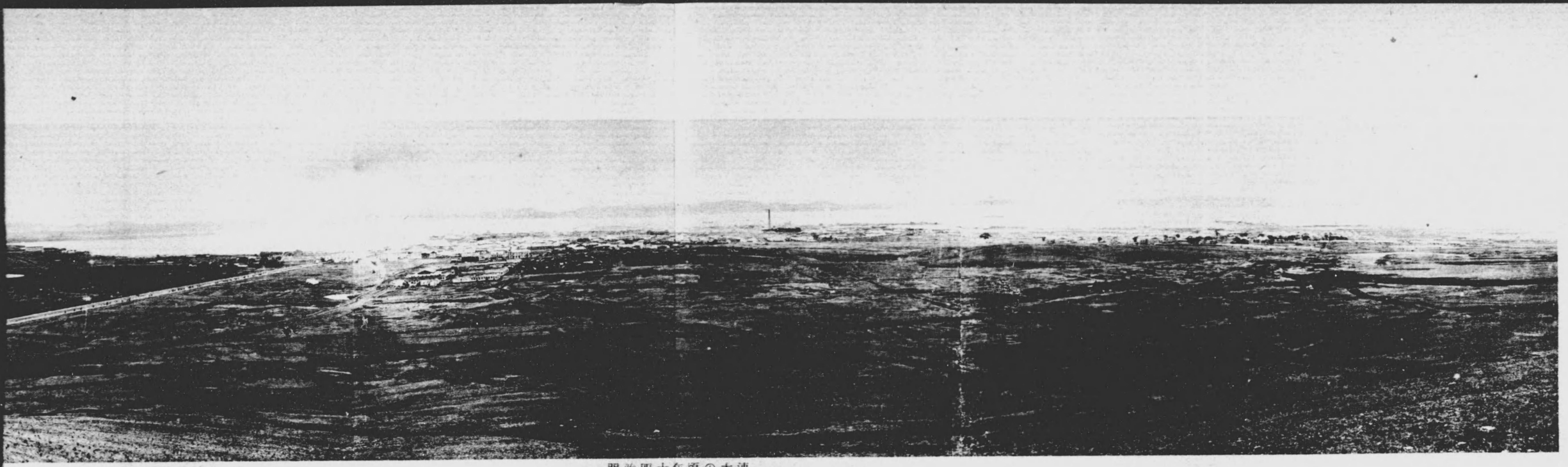
現在の大連



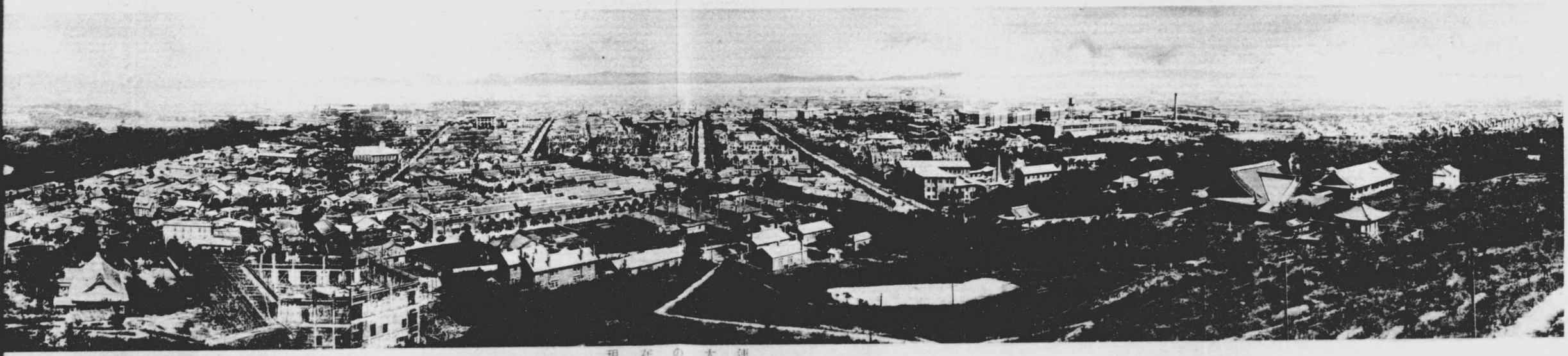
明治四十年頃の大連



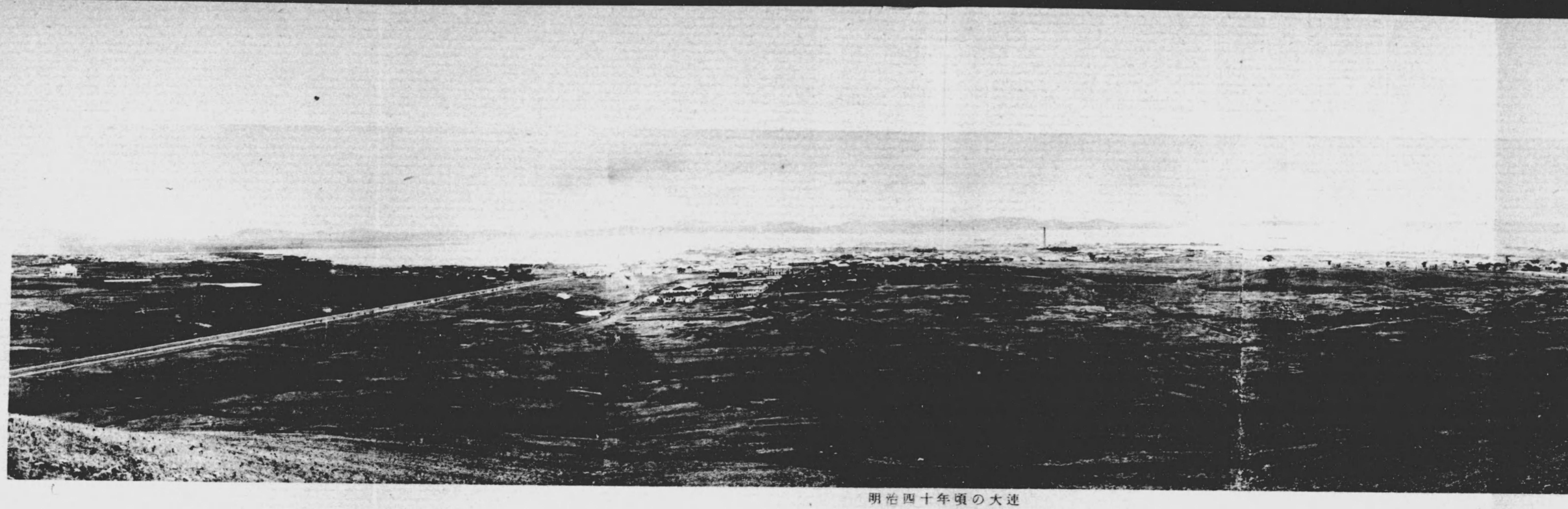
現在の大連



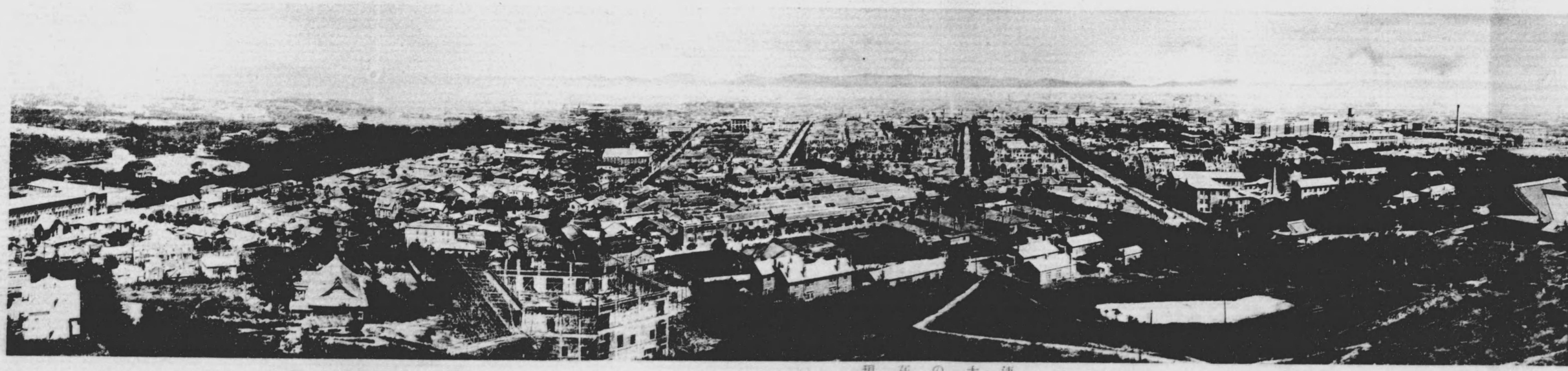
明治四十年頃の大連



現在の大連

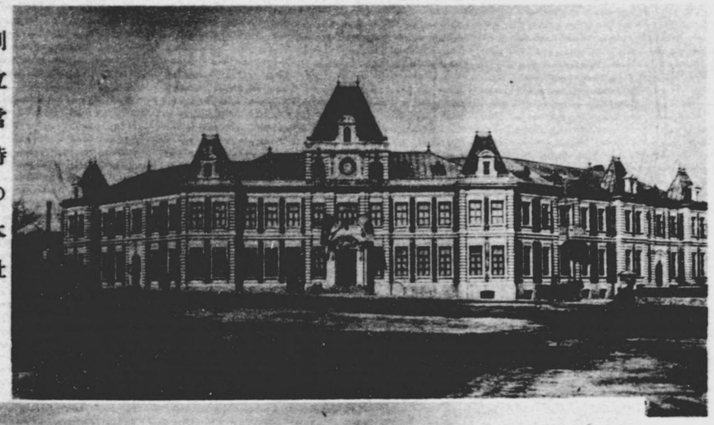


明治四十年頃の大連

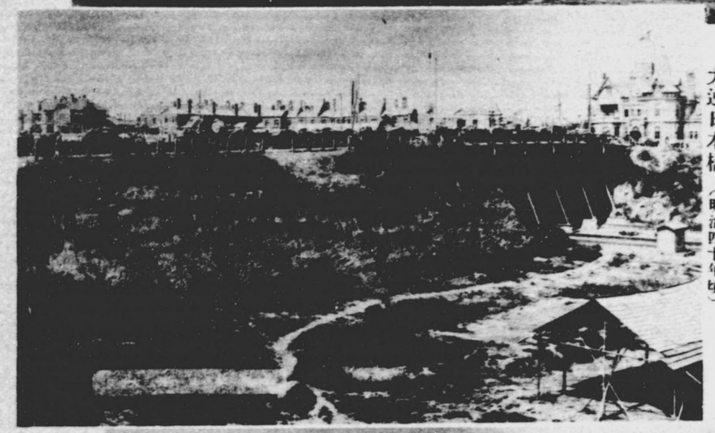


現在の大連

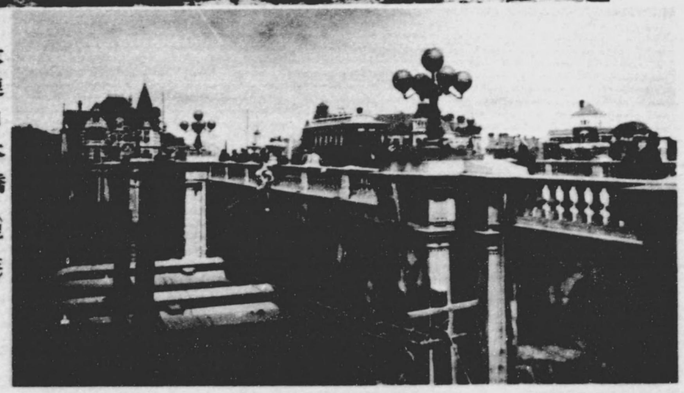
本社全景



創立當時の本社



大連日本橋（明治四十年頃）



大連日本橋（現在）

南滿洲鐵道株式會社二十年略史

第一編　會社の組織

第一章　會社の成立

沿革　明治三十七八年戰役中我大本營は滿洲軍の占領地域內に於ける東淸鐵道を利用する方針を定め三十七年六月東京に於て野戰鐵道提理部を編成し之を滿洲に派遣し逐次五呎軌道を三呎六吋軌道に改修して軍用列車を運轉し三十九年一月四日よりは一般公衆の便乘及託送貨物の取扱を開始し又採炭班を編成して撫順及煙臺に於て石炭を採掘し之を軍用に供すると共に民間への拂下をも行つた斯くて野戰鐵道提理部は明治四十年四月一日南滿洲鐵道株式會社に鐵道及炭坑を引繼ぐまで其任務を繼續したのである

滿洲鐵道經營　明治三十八年九月五日米國ポーツマスに於て調印せられた日露講和條約に據り帝國政府は我南滿洲鐵道を經營するの權利を獲得したのであるが其當時或は之を國家經營となすべしと云ひ或は會社事業となすべしとなし大に議論があつたが遂に勅令を以て株式會社組織となすに至つた其會社の性質に就ては或は商事會社なりとし或は植民會社なりと

云ひ又或は株式國家なりとし是亦世論區々たるものがあつたが岡松法學博士は「南滿洲鐵道株式會社の性質」なる權威ある一論文に依り植民會社なること疑なしと論斷して學界の支持する所となつた卽ち會社は南滿洲に於ける特殊の使命を帶べるものであつて其責任の重大なるは會社本來の性質より見て洵に當然の事と謂はねばならぬ

會社設立命令　日露講和條約の締結に次で明治三十八年十二月二十二日北京に於て成立せる日清滿洲善後條約竝附屬協定に據り長春（寬城子）以南の鐵道及撫順煙臺其他の炭坑經營竝安奉線の改築及經營に關し清國政府の承諾を必要とするものは悉く之を得て政府は是等事業を擔當する機關として明治三十三年九月發布の法律第八十七條（帝國臣民ニシテ外國ニ於テ鐵道ヲ敷設シ運輸業ヲ營マム爲ニ帝國內ニ於テ設立スル會社ニ付テハ勅令ヲ以テ特別ノ規定ヲ設クルヲ得ル件）に準據し三十九年六月七日勅令第百四十二號を以て南滿洲鐵道株式會社設立の件を公布した其條文は左の如くである

第一條　政府ハ南滿洲鐵道株式會社ヲ設立セシメ滿洲地方ニ於テ鐵道運輸業ヲ營マシム

第二條　會社ノ株式ハ總テ記名ト爲シ日支兩國政府及日支兩國人ニ限リ之ヲ所有スルコトヲ得（大正六、七、二八勅令第八九號ヲ以テ改正）

第三條　日本政府ハ滿洲ニ於ケル鐵道其ノ附屬財產及炭坑ヲ以テ其ノ出資ニ充ツルコトヲ得

第四條　會社ハ新ニ募集スル株式總額ヲ數回ニ分チテ募集スルコトヲ得但シ第一回募集額ハ總額ノ五分ノ一ヲ下ルコトヲ得ス

第五條　株金ノ第一回ノ拂込金額ハ株金十分ノ一迄下ルコトヲ得（明治四〇、三、五勅令第二二號ヲ以テ改正）

第六條　會社ハ本社ヲ大連市ニ支社ヲ東京市ニ置ク（大正六、七、三一勅令第八九號及同八、四、一一勅令第百四號ヲ以テ改正）

第七條　會社ニ社長一人副社長一人理事四人以上監事三人乃至五人ヲ置ク（大正六、七、三一勅令第八九號及同八、四、一一勅令第百四號ヲ以テ改正）

第八條　社長ハ會社ヲ代表シ其ノ業務ヲ總理ス（大正六、七、三一勅令第八九號及同八、四、一一勅令第百四號ヲ以テ改正）

副社長ハ社長事故アルトキ其ノ職務ヲ代理シ社長缺員ノトキ其ノ職務ヲ行フ（明治四一、五、三四號ヲ以テ追加）（明治四〇、三、五勅令第二二號ヲ以テ改正）

社長及副社長事故アルトキハ政府ハ理事ノ一人ヲシテ社長ノ職務ヲ代理セシム

副社長及理事ハ社長ヲ補助シ會社ノ業務ヲ分掌ス

監事ハ會社ノ業務ヲ監査ス

第九條　社長副社長ハ勅裁ヲ經テ政府之ヲ命シ其ノ任期ハ五箇年トス（大正六、七、三一勅令第八九號及同八、四、一一勅令第百四號ヲ以テ改正）

理事ハ五十株以上ヲ有スル株主中ヨリ政府之ヲ命シ其ノ任期ハ四箇年トス

監事ハ株主中ヨリ株主總會ニ於テ之ヲ選任シ其ノ任期ハ三箇年トス

第一章　會社の成立

第十條　社長副社長及理事ノ報酬及手當ノ額ハ政府之ヲ定ム（大正六、七、三一勅令第八九號及同八、四、一一勅令第百四號ヲ以テ改正）

第十一條　社長副社長及理事ハ在任中何等ノ名稱ニ拘ラス他ノ職務又ハ商業ニ從事スルコトヲ得ス但シ政府ノ認可ヲ得タルトキハ此ノ限ニ在ラス（大正六、七、三一勅令第八九號及同八、四、一一勅令第百四號ヲ以テ改正）

第十一條ノ二　會社カ一年ヲ營業年度ト定ムル場合ニ於テ當該營業年度ノ利益配當ヲ確實ニ爲シ得ヘキ見込アルトキハ其ノ營業年度經過前一回ヲ限リ一定ノ時期ニ於テ政府以外ノ株主ニ對シ其ノ拂込金額ニ見込配當率ノ半ヲ乘シタル金額ヲ分配スルコトヲ得但シ其ノ分配金額ハ前營業年度繰越金額以內ニシテ且該拂込金額ノ百分ノ三以內タルコトヲ要ス

前項ノ規定ニ依リ分配シタル金額ハ當該營業年度ノ計算ニ付テハ之ヲ會社財產ト看做シ株主ノ異動ニ拘ラス其ノ計算ニ基キ政府以外ノ株主ニ配當スル金額ヨリ之ヲ控除ス（明治四五、五、三〇勅令第百三三號ヲ以テ追加、大正一〇、一一、五勅令第四三〇號ヲ以テ改正）

第十一條ノ三　會社カ社債ヲ募集スルトキハ數回ニ分チテ其ノ拂込ヲ爲サシムルコトヲ得（明治三九、六、九勅令第二四三號ヲ以テ追加）

社債總額ハ拂込株金額ノ二倍ニ至ルコトヲ得但シ其ノ額ハ資本總額ヲ超過スルコトヲ得ス（明治四三、一二、二〇勅令第四號ヲ以テ追加）

第十一條ノ四　社債ノ募集及定款ノ變更ハ總資本ノ半額以上ニ當ル株主出席シ其ノ議決權ノ過半數ヲ以テ之ヲ決ス（明治四〇、三、五勅令第二二號ヲ以テ追加）

第十二條　政府ハ南滿洲鐵道株式會社監理官ヲ置キ會社ノ業務ヲ監視セシム

監理官ハ何時ニテモ事業ノ施設ヲ監査シ會社ノ金庫帳簿及諸般ノ文書物件ヲ檢査スルコトヲ得

監理官ハ必要ト認ムルトキハ何時ニテモ會社ニ命シテ營業上諸般ノ計算及景況ヲ報告セシムルコトヲ得

監理官ハ株主總會其ノ他諸般ノ會議ニ出席シテ意見ヲ陳述スルコトヲ得但シ議決ノ數ニ加ハルコトヲ得ス

第十三條　政府ハ會社ノ事業ニ關シ監督上必要ナル命令ヲ發スルコトヲ得

關東軍司令官ハ會社ノ業務ニシテ軍事ニ關スルモノニ付必要ナル指示ヲ爲スコトヲ得（大正八、四、一一勅令第百四號ヲ以テ追加）

第十四條　會社ノ決議又ハ役員ノ行爲ニシテ法律命令若ハ會社ノ目的ニ違反シ又ハ公益ヲ害シ又ハ監督官廳ノ命シタル事項ヲ執行セサルトキハ政府ハ其ノ決議ヲ取消シ又ハ役員ヲ解職スルコトヲ得

第十五條　政府ハ必要ト認ムルトキハ帝國內ニ於ケル鐵道ニ關スル法令ノ規定ヲ會社ニ適用スルコトヲ得

第二章　會社の組織

第一章　會社の成立

前項ノ場合ニ於テハ政府ハ適用スヘキ法令ノ事項ヲ會社ニ豫告スヘシ

第十六條　本令ニ別段ノ定メナキモノハ商法及附屬法令ノ規定ヲ適用ス

第十七條　明治三十三年勅令第三百六十六號ハ本令ニ依リ設立スル會社ニ之ヲ適用セス

附　則

第十八條　政府ハ設立委員ヲ置キ南滿洲鐵道株式會社設立ニ關スル一切ノ事務ヲ處理セシム

第十九條　設立委員ハ定款ヲ作リ政府ノ認可ヲ得タル後第一回株式ヲ募集スヘシ

第二十條　設立委員ハ第一回株式ノ募集ヲ終リタルトキハ株式申込證ヲ政府ニ差出シ會社設立ノ許可ヲ稟請スヘシ

第二十一條　前條ノ許可ヲ得タルトキハ設立委員ハ遲滯ナク各株式ニ付第一回ノ拂込ヲ爲サシムルコトヲ要ス

前項ノ拂込アリタルトキハ設立委員ハ遲滯ナク創立總會ヲ招集スヘシ

第二十二條　創立總會終結シタルトキハ設立委員ハ其ノ事務ヲ南滿洲鐵道株式會社總裁ニ引渡スヘシ

設立委員　同三十九年七月十三日兒玉參謀總長設立委員長仰付けられた即ち

八十名に同委員仰付けれた即ち

内　閣　二名
大藏省　二名
農商務省　二名
關東州民政署　二名
學者　二名
計　八十名

外務省　三名
陸海軍省　四名
遞信省　七名
貴衆兩院議員　十八名
實業家　三十八名

同月二十四日兒玉設立委員長薨去し翌二十五日寺內陸軍大臣其後任仰付けられ八月一日遞信、大藏、外務の三大臣より左の如き命令書が交付せられた

命令書

南滿洲鐵道株式會社
設立委員長　寺內正毅
外委員八十名

南滿洲鐵道株式會社設立ニ關スル一切ノ事務ヲ管理セシムルニ付左ノ條條ヲ命令ス

明治三十九年八月一日

遞信大臣　山縣伊三郎
大藏大臣法學博士　阪谷芳郎

第一條　其ノ社ハ明治三十八年十二月二十二日調印ノ滿洲ニ關スル日淸條約附屬協約ニ依リ左記鐵道ノ運輸業ヲ營ムヘシ

一　大連長春間鐵道
一　南關嶺旅順間鐵道
一　大房身柳樹屯間鐵道
一　大石橋營口間鐵道
一　煙臺煙臺炭坑間鐵道
一　蘇家屯撫順間鐵道
一　奉天安東縣間鐵道

第二條　前條ノ鐵道ハ會社ノ營業開始ノ日ヨリ起算シ滿三箇年以內ニ四呎八吋半ノ軌間ニ改築スヘシ

大連長春間鐵道ノ內大連蘇家屯間ハ複線ト爲スヘシ

第三條　其ノ社ハ沿道主要ノ停車場ニ旅客ノ宿泊食事及貨物ノ貯藏ニ必要ナル諸般ノ設備ヲ爲スヘシ

線路ノ港灣ニ達スル地點ニ於テ水陸運輸ノ聯絡ニ必要ナル設備ヲ爲スヘシ

第四條　其ノ社ハ鐵道ノ便益ノ爲左ノ附帶事業ヲ營ムコトヲ得

一　鑛業　殊ニ撫順及煙臺ノ炭坑採掘
一　水運業
一　電氣業
一　倉庫業

第五條　其ノ社ハ政府ノ認可ヲ受ケ鐵道及附帶事業ノ用地內ニ於ケル土木敎育衞生等ニ關シ必要ナル施設ヲ爲スヘシ

一　鐵道附屬地ニ於ケル土地及家屋ノ經營
一　其ノ他政府ノ許可ヲ受ケタル營業

第六條　前條ノ經費ヲ支辨スル爲其ノ社ハ政府ノ認可ヲ受ケ鐵道及附帶事業ノ用地內ノ居住民ニ對シ手數料ヲ徵收シ其ノ他必要ナル費用ノ分賦ヲ爲スコトヲ得

第七條　其ノ社ノ資本總額ヲ四億四千萬圓トシ其ノ內貳億貳千萬圓ハ帝國政府ニ於テ之ヲ出資スルモノトス（大正九、三、三〇及同九、九、八、內閣總理大臣ノ命令ヲ以テ改正）

各株式ノ金額ヲ百圓トス（大正四、一二、一內閣總理大臣ノ命令ヲ以テ改正）

第八條　前條政府ノ出資中壹億圓ハ左ノ財產ヨリ成ルモノトス（大正九、九、八、內閣總理大臣ノ命令ヲ以テ改正）

一　既成ノ鐵道

第一編　會社の組織

一　其ノ鐵道ニ附屬セル一切ノ財產但シ租借地內ノ財產ニシテ政府ノ指定スルモノハ之ヲ除ク

一　撫順及煙臺ノ炭坑

第八條ノ二　政府ハ大正九年法律第三十四號ニ依リ大正九年十二月一日ニ於テ其ノ社ノ株式額面壹億貳千萬圓ヲ引受ク（大正九、九、八內閣總理大臣ノ命令ヲ以テ追加）

第九條　政府ニ於テ現在使用スル車輛竝奉天安東縣間輕便鐵道ノ軌條及附屬品ハ相當價格ヲ以テ之ヲ其ノ社ニ賣渡スヘシ

第十條　政府ノ持株以外ノ株式ハ日支兩國人ヨリ之ヲ募集スヘシ（大正九、三、三〇及同九、九、八內閣總理大臣ノ命令ヲ以テ改正）

支那國政府ニ於テ株式ノ引受ヲ希望スルトキハ其ノ社ノ利益配當カ日支兩國政府以外ノ株主（以下單ニ株主ト稱ス）ノ拂込金ニ對シ年六分ノ割合ニ達セサルトキハ政府ハ設立登記ノ日ヨリ起算シ十五箇年（一年ヲ二營業年度ニ分ツトキハ三十營業年度間）ヲ限リ之ヲ補給スヘシ但シ其ノ補給額ハ如何ナル場合ト雖株主ノ拂込金ニ對シ年六分ノ割合ヲ超過スルコトヲ得ス

第十二條　每營業年度ニ於ケル其ノ社ノ利益配當カ株主ノ拂込金ニ對シ年六分ノ割合ヲ超過セサルトキハ政府ノ持株ニ對シ配當ヲ爲スヲ要セス

支那國政府ノ持株ハ帝國政府ノ持株ニ準シ之ヲ取扱フヘシ

第十三條　其ノ社カ鐵道ノ改築又ハ附帶事業ノ經營ノ爲發行スル社債及該社債ヲ整理償還スル爲發行スル社債ニ對シ政府ハ其ノ利子支拂ノ保證ヲ爲スコトアルヘシ

政府ニ於テ保證ヲ爲スヘキ社債ノ額面金額ハ拂込株金額ノ二倍以內ニシテ資本總額ヲ超過スルコトナシ（大正九、九、八內閣總理大臣ノ命令ヲ以テ改正）

第一項ノ社債ハ起債ノ年ヨリ起算シ二十五箇年以內ニ償還スルモノトス

第十四條　前條第一項ノ趣旨ニ依リ發行スル社債ニ對シテハ政府ハ其ノ社債ノ利子ニ相當スル金額ヲ補給ス（明治三九、八、二四外務、大藏、遞信ノ三大臣ノ命令ヲ以テ改正、大藏、遞信改正）

株主ノ拂込金ニ對スル利益配當年六分ノ割合ヲ超過スルニ至リタルトキハ其ノ超過ノ金額ハ先ツ社債ノ利子ニ充當スヘシ此ノ場合ニ於テハ前項補給金ハ該充當額ヲ控除シテ之ヲ下付ス

第十五條　其ノ社ノ利益カ前條ノ社債利子ヲ支拂ヒ尙剩餘アルトキハ該殘額ハ總株式ノ各拂込高ニ對シ配當割合均一ニ至ルマテ之ヲ日支兩國政府持株ニ對スル利益配當カ年四分三厘ノ割合ニ達シタルトキハ株主ノ拂込金ニ對シ年四分ノ割合ヲ超エサル範圍內ニ於テ更ニ第二配當ヲ爲スコトヲ妨ケス（大正三、四、一五內閣總理大臣ノ命令ヲ

第一章　會社の成立

（以下追加、同八、四、五及同九、九、八、内閣總理大臣ノ命令ヲ以テ改正）

前項但書ノ日支兩國政府持株ニ對スル利益配當ノ割合ハ大正十二年四月一日以降ノ營業年度ニ屬スル分ヨリ之ヲ增額スルコトアルヘシ（大正九、九、八、内閣總理大臣ノ命令ヲ以テ追加）

第十六條　第十一條及第十四條ニ規定シタル政府ノ補給金ハ之ニ年六分ノ割合ノ利子ヲ付シ之ヲ毎年元金ニ加算シ政府ニ對スル其ノ社ノ債務トス

其ノ社ノ總株式ニ對スル利益配當カ年一割ノ割合ヲ超過スルニ至リタルトキハ其ノ超過額ハ前項債務ノ償還ニ充ツヘシ（大正九、三、三〇及同九、九、八、内閣總理大臣ノ命令ヲ以テ改正）

第十七條　第十三條ノ社債拂込金ノ使用殘額ハ大藏省預金部ニ預入ヲ爲スヘシ

第十八條　其ノ社ハ毎年度拂込ムヘキ株金及募集スヘキ社債ノ豫算、債券券面額、發行價格、利子歩合、發行ノ期日條件等ヲ定メ政府ノ認可ヲ受クヘシ

第十九條　其ノ社ハ會計及營業ニ關スル規定ヲ定メ政府ノ認可ヲ受クヘシ

前項ノ規定及定款ヲ變更セムトスルトキ亦前項ニ同シ

第二十條　毎營業年度ノ事業計畫、事業費及營業收入ノ豫算、決算竝利益配當割合ハ政府ノ認可ヲ受クヘシ之ヲ變更セムトスルトキ亦同シ

第二十一條　其ノ社ハ政府ノ指定スル所ニ依リ左ノ事項ヲ報告スヘシ

一　事業費及營業收支ノ現況

一　一般事業ノ實況

第二十二條　其ノ社ハ政府ノ許可ヲ得ルニ非サレハ重要ナル權利及財產ヲ處分シ又ハ之ヲ擔保ニ供スルコトヲ得ス

第二十三條　政府ハ必要ト認ムル場合ニ於テハ特別ノ事情アルモノニ限リ運賃ノ低減ヲ命スルコトアルヘシ

第二十四條　政府ハ必要アリト認ムルトキハ其ノ社ノ事業ニ關シ設備ノ新設又ハ變更ヲ命スルコトヲ得

第二十五條　其ノ社ハ政府ノ指定スル所ニ依リ何時ニテモ鐵道土地其ノ他ノ物件ヲ政府ノ用ニ供スルノ義務ヲ負フ

第二十六條　本命令書中政府ノ補給及保證ニ關スル條項ハ帝國議會ノ協贊ヲ經テ確定スルモノトス

同三十九年八月七日遞信大臣より事務處理の手續を示達せられ同月十日第一回委員總會を開き事務章程に基き常務委員及定款調査委員を指名し翌十一日工費概算調査委員の指名あり各委員會は數回に亙つて審議調査を累ね同月十八日遞信大臣より定款竝工費概算原案を認可せられた

斯くて同年九月十日第一回株式募集事務を開始し十月五日締切に於て拾萬株の募集に對し

第一編　會社の組織

實に壹億六百六拾四萬參千四百拾八株の應募あり全く財界空前のことであつた而して十一月二日より七日に至る間各申込人に對し株主確定通知を發し越えて十一月十三日男爵後藤新平總裁仰付けられ次で副總裁及理事の任命あり同月二十六日の創立總會に於て監事の選任があつた總裁以下重役は左の如くである

總裁　後藤新平
副總裁　中村是公
理事　國澤新兵衛　　久保田政周
犬塚信太郎　　久保田勝美
田中清次郎　　野々村金五郎
清野長太郎
監事　中橋徳五郎　　河上謹一
瀧兵右衛門　　馬越恭平
岩下清周

十一月二十七日本社を東京市麻布區狸穴町四番地に設置し寺內設立委員長代理關委員と後藤總裁代理中村副總裁は設立事務所に會して一切の事務及財產目錄の授受を結了し十二月七日會社設立の登記を了し玆に會社は完全に成立したのである

第二章　定款　附株主總會

會社の定款は創立以來株主總會の議決を經て幾度か改正增補せられ現行の定款は左の如くである

南滿洲鐵道株式會社定款

第一章　總則

第一條　本會社ハ南滿洲鐵道株式會社ト稱シ明治三十九年勅令第百四十二號ニ依リ日本帝國政府ノ命令ヲ遵奉シテ設立スルモトノトス

第二條　本會社ノ株主ノ責任ハ其ノ株式ノ金額ヲ以テ限度トス

第三條　本會社ハ本社ヲ大連市ニ支社ヲ東京市ニ置ク（明治四〇、四、一六臨時株主總會ノ決議ニ依リ改正）

第四條　本會社ノ目的ハ左ノ如シ

一　滿洲ニ於テ左ニ揭クル鐵道ノ運輸業ヲ營ムコト

一　大連長春間鐵道
一　南關嶺旅順間鐵道
一　大房身柳樹屯間鐵道
一　大石橋營口間鐵道

第一編　會社の組織

第二章　定　款

一　煙臺煙臺炭坑間鐵道
一　蘇家屯撫順間鐵道
一　奉天安東縣間鐵道
一　鐵道ノ便益ノ爲左ノ附帶事業ヲ營ムコト
一　鑛業殊ニ撫順及煙臺ノ炭坑採掘
一　水　運　業
一　電　氣　業
一　倉　庫　業
一　鐵道附屬地ニ於ケル土地及家屋ノ經營
一　其ノ他政府ノ許可ヲ得タル營業

第五條　本會社ノ資本ハ金四億四千萬圓トス但シ第一回ノ株式募集額ハ日本帝國政府持株ノ外金二千萬圓トシ第二回以後ハ漸次必要ニ應シ株主總會ノ決議ニ依リテ募集スルモノトス（大正九、四、一六臨時株主總會ノ決議ニ依リ改正）

第六條　本會社ノ公告ハ本社所在地ニ於テ關東廳カ公告ヲ掲載スヘキ新聞紙ヲ以テスヘシ（明治四〇、四、一六及大正八、五、三臨時株主總會ノ決議ニ依リ改正）

第二章　株　式

第七條　本會社ノ株券ハ總テ記名式トシ一株ヲ金百圓トス（大正四、六、一九定時株主總會ノ決議ニ依リ改正）

第八條　本會社ノ株券ハ左ノ七種トス

一株券　五株券　十株券　五十株券　一百株券　一千株券　一萬株券

第九條　本會社ノ株券ニハ社名、登記年月日、資本ノ總額、一株ノ金額、募集ノ回數、拂込ノ金額及番號ヲ記載シ社長之ニ記名調印スルモノトス（大正六、八、二五及同八、五、三並同九、四、一六臨時株主總會ノ決議ニ依リ改正）

第十條　株金拂込ハ事業ノ必要ニ應シ社長其ノ拂込金額及期限ヲ定メ少クトモ六十日前ニ各株主ニ之カ通知ヲ發スヘシ（明治四五、三、一一臨時株主總會、大正四、六、一九定時株主總會及同八、五、三及同九、四、一六臨時株主總會ノ決議ニ依リ改正）

第十一條　株主拂込ノ期日ニ株金ノ拂込ヲ爲サヽルトキハ三十日以內ニ拂込ヲ爲サヽルトキハ三十日ヲ經テ其ノ拂込ヲ爲サヽルトキハ本會社ノ株主ダル權利ヲ失フヘキ旨ノ催告ヲ爲シ期限ニ至リ仍ホ拂込ヲ爲サヽルトキハ本會社ノ株主ダル權利ヲ失フヘキ旨ヲ通知スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ其ノ權利ヲ失ヒタルトキハ先ニ拂込ミタル證據金ハ之ヲ還付セス

第十二條　第一回株金拂込期日後十五日ヲ經テ拂込ヲ爲サヽルトキハ三十日以內ニ其ノ拂込ヲ爲スヘキ旨及其ノ期間內ニ之ヲ爲サヽルトキハ株主ノ權利ヲ失フヘキ旨ヲ通知スルコトヲ得

第一編　會社の組織

前項ノ場合ニ於テ株主カ其ノ權利ヲ失ヒタルトキハ會社ハ株式ノ各讓渡人ニ對シ十五日以內ニ拂込ヲ爲スヘキ旨ノ催告ヲ發シ最先ニ滯納金額ノ拂込ヲ爲シタル讓渡人株式ヲ取得スルモノトス讓渡人ニ於テ拂込ヲ爲ササルトキハ會社ハ株式ヲ競賣ニ付シ其ノ金額カ滯納金額ニ滿タサルトキハ從前ノ株主ヲシテ其ノ不足額ヲ辨濟セシムルモノトス若從前ノ株主カ十四日以內ニ之ヲ辨濟セサルトキハ會社ハ讓渡人ニ對シテ其ノ辨濟ヲ請求スルモノトス

第十四條　前條ニ定メタル讓渡人ノ責任ハ讓渡ヲ株主名簿ニ記載シタル後二箇年ヲ經過シタルトキハ消滅スルモノトス

第十五條　會社其ノ他公私ノ法人カ本會社ノ株式ヲ所有スルトキハ其ノ代表者ヲ定メ本會社ノ株主名簿ニ之カ記載ヲ受クヘシ

株式カ數人ノ共有ニ屬スルトキハ共有者ハ株主ノ權利ヲ行フヘキ者一名ヲ定ムルコトヲ要ス

共有者ハ連帶シテ株金拂込ノ義務ヲ負フモノトス

第十六條　株式ヲ讓渡スルトキハ本會社所定ノ書式ニ依リ當事者連署ノ書面ヲ以テ株券ノ書替ヲ請求スヘシ但シ相續ノ開始遺言又ハ裁判ノ執行等ニ依リ株式ヲ繼承シタル者カ書替ヲ請求スル場合ニ於テハ戸籍吏ノ證明書若ハ會社ニ於テ必要ト認ムル證據書類ヲ添附スルコトヲ要ス

株式ノ讓渡ハ讓受人ノ氏名住所ヲ株主名簿ニ記載シ且其ノ氏名ヲ株券ニ記載スルニ非サレハ本會社ニ對シテ其ノ效力ナキモノトス

第十七條　株券ヲ毀損亡失シタル株主ハ其ノ事由ヲ詳記シ二人以上ノ保證人連署ノ證書ヲ差出シ新株券ノ交付ヲ請求スルコトヲ得但シ亡失ノ場合ニ於テハ請求者ノ費用ヲ以テ其ノ旨ヲ公告シ其ノ公告ノ日ヨリ六十日ヲ經ルモ異議ヲ申立ツル者ナキトキニ限リ新株券ヲ交付スルモノトス

第十八條　株券ノ種類ヲ變更セムトスル者ハ其ノ株券ニ請求書ヲ添ヘテ之ヲ差出スヘシ

第十九條　株券ノ名義書替新株券ノ交付及株券種類ノ變更ニ付テハ本會社ノ定ムル手數料ヲ徵收ス

第二十條　本會社ハ定時總會前三十日ヲ超エサル期間及每年十一月二十二日ヨリ十二月一日ニ至ル十日間株式ノ名義書替ヲ停止スヘシ（明治四五、六、二二定時株主總會及大正九、一六臨時株主總會ノ決議ニ依リ改正）

第三章　株　主

第二十一條　本會社ノ株主ハ日支兩國政府及日支兩國人ニ限ルモノトス（大正六、八、二五臨時株主總會ノ決議ニ依リ改正）

第二十二條　日本帝國政府ハ左ノ財產ヲ出資シ本會社ハ其ノ財產價格金壹億圓ニ對シ百萬

株ヲ與フルモノトス（大正四、六、一九定時株主總會ノ決議ニ依リ改正）

一　既成ノ鐵道（現在使用スル車輛竝奉天安東縣間輕便鐵道ノ軌條及附屬品ハ之ヲ除ク）

一　右鐵道ニ附屬セル一切ノ財產但シ租借地內ノ財產ニシテ政府ノ指定スルモノハ之ヲ除ク

一　撫順及煙臺ノ炭坑

日本帝國政府ハ前項出資ノ外大正九年法律第三十四號ニ依リ大正九年十二月一日ニ於テ株式額面壹億貳千萬圓ヲ引受ケ本會社ハ之ニ對シ百二十萬株ヲ與フルモノトス（大正九、四、九、一一臨時株主總會ノ決議ニ依リ改正）

日本帝國政府ハ前項株式引受ノ日ニ於テ本會社發行ニ係ル英貨社債額面壹千貳百萬磅ノ元利支拂ノ義務ヲ承繼シ株金壹億壹千七百拾五萬六千圓ノ拂込ニ充ツルモノトス

第二十三條　各株主ハ一株ニ付一箇ノ議決權ヲ有ス

第二十四條　株主又ハ法定代理人ハ株式取得ノ時其ノ住所氏名及印鑑ヲ本會社ニ屆出ツヘシ其ノ變更アリタルトキ亦同シ

外國ニ住所ヲ有スル株主又ハ法定代理人ニ對シテハ帝國內ニ假住所又ハ代理人ヲ定メシムルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ其ノ假住所又ハ代理人ヲ本會社ニ屆出ツヘシ其ノ變更アリタルトキ亦同シ（大正九、四、一六臨時株主總會ノ決議ニ依リ本項追加）

第四章　總　會

第二十五條　定時總會ハ每年六月、臨時總會ハ社長又ハ監事ノ必要ト認ムルトキ及總株數ノ十分ノ一以上ニ當ル株主ヨリ總會ノ目的及招集ノ理由ヲ記載シタル書面ヲ提出シ總會ノ招集ヲ請求シタルトキ社長之ヲ招集スヘシ但シ株主カ總會ノ招集ヲ請求シタル場合ニ於テハ社長ハ十四日以內ニ招集ノ手續ヲ爲スコトヲ要ス（明治四五、三、一一、大正六、八、二五同八、五、三臨時株主總會ノ決議ニ依リ改正）

第二十六條　總會ノ議事ハ豫メ通知シタル事項ノ外ニ涉ルコトヲ得ス（大正九、四、一六臨時株主總會ノ決議ニ依リ改正）

第二十七條　總會ノ日時及場所ハ社長之ヲ定メ少クトモ二週間以前ニ株主ニ之カ通知ヲ發スヘシ（明治四〇、四、一六、大正六、八、二五及同八、五、三臨時株主總會ノ決議ニ依リ改正）

第二十八條　總會ノ議長ノ職務ハ社長之ヲ行フ（大正六、八、二五及同八、五、三臨時株主總會ノ決議ニ依リ改正）

第二十九條　株主ハ本會社ノ株主ニ限リ代理ヲ委託スルコトヲ得但シ其ノ委任狀ハ本會社ニ差出スヘシ

第三十條　總會ノ議長ハ株主トシテ其ノ議決權ヲ行使スルコトヲ妨ケス

第三十一條　總會ノ決議ハ出席シタル株主ノ議決權ノ過半數ヲ以テ之ヲ爲スモノトス可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

第三十二條　社債ノ募集及定款ノ變更ハ總資本ノ半額以上ニ當ル株主出席シ其ノ議決權ノ過半數ヲ以テ之ヲ決ス（明治四〇、四、一六臨時株主總會ノ決議ニ依リ改正）

前項ノ場合ニ於テ出席株主定數ニ充タサルトキハ出席シタル株主ノ議決權ノ過半數ヲ以テ假決議ヲ爲シ各株主ニ對シテ其ノ假決議ノ趣旨ノ通知ヲ發シ更ニ一箇月以內ニ第二回ノ總會ヲ招集スヘシ（大正九、四、一六臨時株主總會ノ決議ニ依リ改正）

第二回ノ總會ニ於テハ出席シタル株主ノ議決權ノ過半數ヲ以テ假決議ノ認否ヲ決ス

第三十三條　總會議事ノ要領ハ總會議事錄ニ記載シ議長ハ總會ニ出席シタル重役ト共ニ署名捺印スヘシ

第三十四條　總會ノ議長ハ會議ヲ延期シ會場ヲ變更スルコトヲ得但シ延期會議ノ議事ハ前會議ニ於テ議了セサリシ事項ノ外ニ渉ルコトヲ得ス

第五章　重　役（本章中社長副社長ハ大正六、八、二五臨時株主總會ノ決議ニ依リ總裁副總裁ヲ理事長一人ニ改正、大正八、五、三臨時株主總會ノ決議ニ依リ更ニ之ヲ社長副社長ニ改正セルモノナリ）

第三十五條　本會社ノ重役ハ左ノ如シ

社　長　一　人
副社長　一　人
理　事　四人以上
監　事　三人乃至五人

第三十六條　社長副社長ノ任期ハ五箇年トシ勅裁ヲ經テ政府之ヲ任命スルモノトス理事ハ其ノ任期ヲ四箇年トシ五十株以上ヲ有スル株主中ヨリ政府之ヲ任命スルモノトス

監事ハ其ノ任期ヲ三箇年トシ株主中ヨリ株主總會ニ於テ之ヲ選任スルモノトス

第三十七條　社長副社長及理事ノ報酬及手當ノ額ハ政府ノ定ムル所ニ依ル

監事ノ報酬ハ株主總會ノ決議ヲ以テ之ヲ定ムルモノトス

第三十八條　理事ハ其ノ在任中所有ノ株式五十株ヲ監事ニ預ケ置クヘシ但シ此ノ株式ハ退任スルモ總會ニ於テ其ノ在任中取扱ヒタル事務ノ承認アリタル後ニ非サレハ之ヲ還付セス

第三十九條　監事中缺員ヲ生シタルトキハ監事株主總會ヲ開キ補缺選擧ヲ行ヒ前任者ノ殘任期間其ノ職ニ就カシム但シ二名以下ニ減シタル場合ノ外ハ補缺選擧ハ次ノ總會迄之ヲ延期スルコトヲ得

第四十條　社長ハ會社ヲ代表シ其ノ業務ヲ總理スルモノトス

副社長ハ社長事故アルトキ其ノ職務ヲ代理シ社長缺員ノトキ其ノ職務ヲ行フモノトス

社長及副社長事故アルトキハ政府ハ理事ノ一人ヲシテ社長ノ職務ヲ代理セシムルモノトス（明治四一、六、二七臨時株主總會ノ決議ニ依リ本項追加）

理事ハ社長及副社長ヲ補助シ會社ノ業務ヲ分掌スルモノトス

監事ハ會社ノ業務ヲ監査スルモノトス

第四十一條　社長副社長及理事ハ政府ノ認可ヲ受クルニ非サレハ在任中何等ノ名稱ニ拘ラ

第一編　會社の組織

ス他ノ職務又ハ商業ニ従事スルコトヲ得サルモノトス

第四十二條　社長ハ定款及總會ノ決議錄ヲ本社及支社ニ備ヘ置キ且株主名簿及社債原簿ヲ本社ニ備ヘ置クヘシ

第四十三條　社長ハ定時總會ノ會日ヨリ七日前ニ左ノ書類ヲ監事ニ提出スルコトヲ要ス

一　財產目錄

二　貸借對照表

三　事業報告書

四　損益計算書

五　準備金及利益ノ配當ニ關スル議案

第四十四條　社長ハ定時總會ノ會日前ニ前條ニ揭ケタル書類及監事ノ報告書ヲ本社ニ備フルコトヲ要ス

第四十五條　社長ハ第四十三條ニ揭ケタル書類ヲ定時總會ニ提出シテ其ノ承認ヲ求ムルコトヲ要ス

社長ハ前項ノ承認ヲ得タル後貸借對照表ヲ公告スルコトヲ要ス

第四十六條　監事ハ社長カ株主總會ニ提出セムトスル書類ヲ調査シ株主總會ニ其ノ意見ヲ報告スルコトヲ要ス

第四十七條　監事ハ何時ニテモ社長ニ對シテ營業ノ報告ヲ求メ又ハ會社ノ業務及會社財產ノ狀況ヲ調査スルコトヲ得ルモノトス

第六章　監　理　官

第四十八條　南滿洲鐵道株式會社監理官ハ何時ニテモ事業ノ施設ヲ監査シ會社ノ金庫帳簿及諸般ノ文書物件ヲ檢査スルコトヲ得ルモノトス

監理官ハ必要ト認ムルトキハ何時ニテモ會社ニ命シテ營業上諸般ノ計算及景況ヲ報告セシムルコトヲ得ルモノトス

監理官ハ株主總會其ノ他諸般ノ會議ニ出席シテ意見ヲ陳述スルコトヲ得ルモノトス但シ議決ノ數ニ加ハルコトヲ得ス

第七章　會　計

第四十九條　本會社ノ會計年度ハ四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル（明治四五、三、一臨時株主總會ノ決議ニ依リ改正）

第五十條　本會社ハ資本ノ四分ノ一ニ達スル迄ハ利益ヲ配當スル毎ニ準備金トシテ其ノ利益ノ二十分ノ一以上ヲ積立ツルモノトス

前項以外ノ準備積立金ニ付テハ總會ノ決議ヲ以テ之ヲ定ム

第五十一條　株主配當金ハ六月一日現在ノ株主名簿ニ依リ株主ニ之ヲ拂渡スモノトス（明治四五、

三、一一臨時株主總會ノ決議ニ依リ改正）

第五十二條ノ一　毎營業年度ニ於ケル利益配當カ日支兩國政府以外ノ株主（以下單ニ株主ト稱ス）ノ拂込金ニ對シ年六分ノ割合ニ達セサルトキハ設立登記ノ日ヨリ十五箇年間日本帝國政府ヨリ補給セラルルモノトス但シ其ノ補給額ハ如何ナル場合ト雖モ株主ノ拂込金ニ年六分ノ割合ヲ超過セス（明治四五、六、二二定時株主總會ノ決議ニ依リ第五十二條ノ一ヲ改正、大正六、八、二五臨時株主總會ノ決議ニ依リ改正）

第五十二條ノ二　本會社ハ當該營業年度ノ利益配當ヲ確實ニ爲シ得ヘキ見込アルトキハ其ノ營業年度經過前一回ヲ限リ政府以外ノ株主ニ對シ其ノ拂込金額ニ見込配當率ノ半ヲ乘シタル金額ヲ分配スルコトヲ得ルモノトス但シ其ノ分配金額ハ前營業年度繰越金額以內ニシテ且該拂込金額ノ百分ノ三以內タルモノトス

前項ノ規定ニ依ル分配金ハ毎年十二月一日現在ノ株主名簿ニ依リ之ヲ拂渡スモノトス

前二項ノ規定ニ依リ拂渡シタル分配金ハ當該營業年度ノ會社ノ計算ニ付テハ之ヲ會社財產ト看做シ定時總會ニ於テハ此ノ計算ニ基キ利益ノ配當ヲ決議ス但シ政府以外ノ株主ニ對スル利益配當金ノ拂渡ハ株主ノ異動ニ拘ラス其ノ金額ヨリ第一項ノ規定ニ依リ分配シタル金額ヲ控除シタル殘額ノ拂渡ニ依リ之ヲ爲スモノトス

第五十三條　毎營業年度ニ於ケル利益配當カ株主ノ拂込金ニ對シ年六分ノ割合ヲ超過セサルトキハ日本帝國政府ヨリ其ノ利子支拂ノ保證ヲ受ケ仍ホ必要アラハ元金支拂ヲ保證セラルルコトアルヘシ（大正六、八、二五臨時株主總會ノ決議ニ依リ改正）

日本帝國政府ヨリ保證ヲ受クヘキ社債ノ總額ハ拂込金額ノ二倍以內ニシテ資本總額ヲ超過セサルモノトス（明治四三、二、五臨時株主總會ノ決議ニ依リ改正）

第一項ノ社債ハ起債ノ年ヨリ二十五箇年以內ニ償還スルモノトス

第五十五條　前條第一項ノ趣旨ニ依リ發行スル社債ニ對シテハ日本帝國政府ヨリ其ノ社債ノ利子ニ相當スル金額ヲ補給セラルルモノトス

株主ノ拂込金ニ對スル利益配當年六分ノ割合ヲ超過スルニ至リタルトキハ其ノ超過ノ金額ハ先ツ社債ノ利子ニ充當ス此ノ場合ニ於テハ前項補給金ハ該充當額ヲ控除シテ之ヲ下付セラルルモノトス

第五十六條　本會社ノ利益カ前條ノ社債利子ヲ支拂ヒ尙ホ剩餘アルトキハ該殘額ハ總株式ノ各拂込高ニ對シ配當割合均一ニ至ルマテ之ヲ日支兩國政府持株ニ配當スルモノトス（大正六、八、二五臨時株主總會ノ決議ニ依リ改正）

但シ日支兩國政府持株ニ對スル利益配當カ年四分三厘ノ割合ニ達シタルトキハ株主ノ拂込金ニ對シ年四分ノ割合ヲ超エサル範圍內ニ於テ更ニ第二配當ヲ爲スコトヲ得ルモノト

ス（大正三、六、二〇定時株主總會ノ決議ニ依リ但書追加、大正八、五、三及同九、九、一一臨時株主總會ノ決議ニ依リ改正）

第五十七條　第五十二條ノ一及第五十五條ニ規定シタル日本帝國政府ノ補給金ハ之ニ年六分ノ割合ノ利子ヲ付シ之ヲ毎年元金ニ加算シ日本帝國政府ニ對スル本會社ノ債務トス（大正二、六、一四定時株主總會ノ決議ニ依リ改正）

本會社ノ總株式ニ對スル利益配當カ年一割ノ割合ヲ超過スルニ至リタルトキハ其ノ超過額ハ前項債務ノ償還ニ充ツルモノトス（大正九、四、一六及同九、九、一一臨時株主總會ノ決議ニ依リ改正）

第八章　設　立　費　用

第五十八條　本會社ノ設立費用ハ金五萬圓ヲ限度トス

前項金額中政府ノ立替ニ係ルモノハ政府ニ之ヲ返納スルモノトス

附　則

第五十九條　本會社ノ資本中大正九年四月十六日臨時株主總會ノ決議ニ依リ增加シタル資本ノ內金五千萬圓ニ對スル株式五十萬株ハ額面以上ノ價格ヲ以テ發行スルモノトス但シ數回ニ分チ之ヲ募集スルコトヲ妨ケス（大正九、四、一六臨時株主總會ノ決議ニ依リ改正）

株主總會　明治三十九年十一月東京に創立總會開會以來定時株主總會を開會すること二十五回（內第十回迄は每年二回開會、其後定款改正の結果年一回開會）、臨時株主總會を開會すること十四回である

第三章　政府出資財産の引繼及引渡

引繼物件　明治三十九年十一月十一日遞信、大藏、外務の三大臣より設立委員長に對し政府の出資に充つべき鐵道及其附屬財產竝炭坑の權利移轉に關する命令書を交付せられ翌四十年四月一日會社の營業開始と同時に大體左の如く實地の引渡を受けたのである

一　大連長春間、南關嶺旅順間、大房身柳樹屯間、大石橋營口間、煙臺煙臺炭坑間、蘇家屯撫順間鐵道及奉天安東縣間の鐵道竝撫順及煙臺の炭坑

二　前號鐵道及炭坑用竝奉天新民屯間鐵道用の器械器具材料其他保管物品

三　租借地內外に於ける鐵道及炭坑に附屬する土地建物悉皆（但安東縣及營口の土地に關しては別に定むるところに依る）

新奉鐵道の管理竝引渡　奉天新民屯間鐵道及其一切の附屬固定物件は明治四十年四月一日政府出資財產の引繼と共に一時會社に引渡されたが同年四月十五日の新奉及吉長鐵道に關する協約に據つて淸國政府に引渡されることゝなり六月一日奉天に於て其附屬建物及其他の物件を併せ引繼を了した

寬城子停車場南方鐵道及同附近炭坑の引繼　寬城子停車場南方の線路及其附屬物件、石碑嶺陶家屯に於ける炭坑及其附屬物件の授受は千九百七年六月十三日聖彼得堡に於て署名

せられた議定書條文に據つて我政府は當會社に、露國政府は東清鐵道會社に各訓令を發し雙方委員は明治四十年七月十五日より同十八日迄實地に就て其授受を了り相互議定書に調印した

寬城子停車場報償金　日露講和條約に據る寬城子停車場は日露兩國何れに屬すべきか議論があつたが日露鐵道接續假條約附屬議定書に據つて其解決を見るに至つた卽ち

寬城子停車場及附屬物件ハ原則上日本國及露西亞國ノ共有物ナリト雖モ實際ノ便宜上該停車場及其他附屬物ハ露西亞國ノ專有ニ歸スヘク之カ爲メ露西亞國政府ハ日本國カ寬城子停車場及其附屬物件ノ共同所有權ヲ放棄シタルノ報償トシテ露貨五十六萬三百九十三ルーブルヲ日本國政府ニ支拂フヘシ(第一條)

之に依つて會社は明治四十年八月二十三日該金額を受領し政府出資金壹億圓中に包含せしめた

第四章　業務開始

明治三十九年十二月二十日中村副總裁は六名の理事と共に滿洲の狀況視察と引繼準備の爲東京を出發し其途次二十一日副總裁は久保田、田中、野々村の三理事を伴ひ伊勢大廟玉垣御門內に參拜し社運の隆興を祈り一行は同月二十七日より翌年一月二日の間に大連に著し二月十一日初めて假事務所を開始した

是より先後藤總裁は就任後間もなく明治三十九年十一月十九日特に御陪食仰付られ後御座所に於て親しく左の優渥なる御言葉を賜つた

南滿洲鐵道ノ事業ハ困難ニシテ其關係スル所重大ナリ十分盡力セムコトヲ望ム

かくて會社成立後開業の準備に從事すること四箇月餘、明治四十年四月一日野戰鐵道提理部共他の官憲より鐵道其他の引渡を受け大連に本社事務所を移轉し業務を開始した

爾來事業の膨脹に伴ひ大連東公園町所在露治時代の半成建物を修築し明治四十二年二月之に移轉したが業務の擴張は再び事務所の狹隘を告ぐるに至り大正元年十二月本館と相對して分館を新築し其後數次增築して現在に及んだのである

第五章　會社の監督

監督官廳

會社に關する事項は其設立當時に在つては遞信大臣の管理に屬し關東都督は遞信大臣の監督を承け第一次監督の任に當つて居た其監督事項に就ては明治四十一年七月二十一日遞信大臣より左の如く會社に對し移牒せられた

一　事業計畫ニ關スル件
二　豫算決算ニ關スル件
三　利益配當割合ニ關スル件
四　定款ニ關スル件
五　補給金ニ關スル件
六　社債ニ關スル件
七　役員ニ關スル件
八　監理官ニ關スル件
九　命令書第二十二號ニ關スル件
十　其ノ他營業及會計ニ關スル件
十一　以上ノ外鐵道運輸業及之ニ附帶スル事業ニ關スル事項

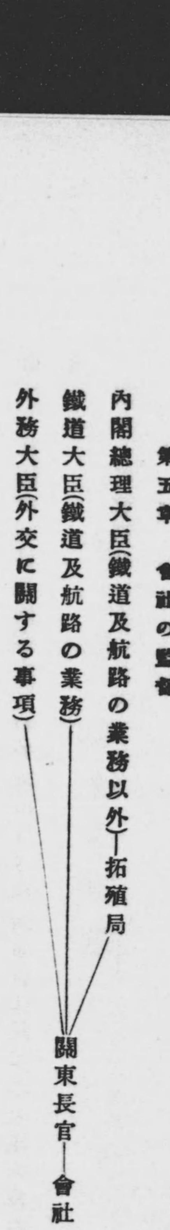
前各號ニ列記セル事項ト雖其ノ外交ニ關スルモノハ外務大臣ノ主管タルモノトス

次で明治四十一年十二月內閣總理大臣の管理に移され同時に關東都督は內閣總理大臣の監督を承くることゝなつた此時以來會社監督の補佐機關は或は鐵道院となり或は拓殖局となつた其變遷を摘記すれば左の如くである

明治四十一年十二月　內閣總理大臣—鐵道院—關東都督—會社
明治四十四年八月　內閣總理大臣—拓殖局—關東都督—會社
大正二年五月　內閣總理大臣（拓殖局（鐵道以外ノ業務）鐵道院（鐵道業務））—關東都督—會社
大正二年六月　內閣總理大臣—鐵道院—關東都督—會社
大正六年七月　內閣總理大臣—拓殖局—關東都督（會社業務ノ統裁）
大正八年四月　內閣總理大臣—拓殖局—關東長官—會社
大正九年五月內閣總理大臣の管理に拓殖局の管掌に係る會社に關する事務の中鐵道及航路に關する事務の監督は鐵道大臣の管理に移され其事務に就ては鐵道大臣の監督を受くることゝなつた

現在の監督系統は左の如くである

第一圖　會社の組織



監理官

南滿洲鐵道株式會社監理官は常に第二次監督官廳に於て會社監督の任に當り株主總會其他諸般の會議に出席して意見を陳述する事を得るばかりでなく何時にても事業の施設を監査し會社の金庫帳簿及諸般の文書竝物件を檢査し營業に關する諸般の計算及狀況を報告せしむることを得又會社の方針業務の改善其他の諸事項に就き主務大臣に意見を具申することが出來る

第六章　重役

後藤子爵就任事情　明治三十九年十一月十三日當時の後藤臺灣總督府民政長官が最初の南滿洲鐵道株式會社總裁に就任するに就ては相當の經緯があつた初め政府は總裁の適任者を得るに頗る苦心した結果兒玉參謀總長をして後藤子爵に說く所あらしめた然るに子爵は容易に就任を應諾せず再三辭讓した其主たる理由は滿洲經營の中心は鐵道にあるが其經營の大任に當るべき會社統理の中心點が明かでなく一方に關東都督の監督を受くると共に他方外務大臣の指揮に俟たねばならぬ斯くの如きは日本の對滿植民政策を無中心に陷らしむるものであり到底滿鐵總裁として新植民地經營の大任を全うすることが出來ぬと言ふにあつたが山縣元帥西園寺首相寺內陸相等が勸說に努め殊に兒玉參謀總長の子爵に對する懇諭到らざるなく而も未だ事の決せない間に突如參謀總長の薨去に遇ひ子爵は遂に八月一日に至つて南滿洲鐵道株式會社總裁は關東都督の監督の下に立つと同時に都督府顧問として外務大臣監督の下に立つ即ち都督府行政の一切を與り聽くべしとの條件を以て就任を受諾するに至つたのである同年八月二十二日子爵が山縣元帥西園寺首相及林外相の同覽に供した「滿鐵總裁就職情由書」はこの間の事情を詳かにするものである

重役の異動　會社の重役は會社設立以來大正六年七月迄總裁副總裁各一人理事四人以上

監事三人乃至五人であつたが同年七月三十一日總裁副總裁を廢して理事長を置いたが八年四月十一日理事長を廢し社長副社長各一人を置き現在に及んでゐる

社長副社長は勅裁を經て政府之を命じ其任期は五年、理事は五十株以上を有する株主中より政府之を命じ其任期は四年、監事は株主中より株主總會に於て之を選任し其任期は三箇年である

今創立以來重役の任免を擧ぐれば左の如くである

○後藤新平　明治三十九年十一月十三日總裁任命、四十一年七月十四日退任

○△中村是公　明治三十九年十一月二十六日副總裁任命、四十年四月二十五日退任、四十年五月一日副總裁事務取扱囑託、四十一年五月十五日副總裁任命、四十一年十二月十九日總裁任命、大正二年十二月十八日退任

○△國澤新兵衛　明治三十九年十一月二十六日理事任命、四十一年十二月十九日副總裁任命、大正二年十二月十八日退任、三年七月二十日副總裁任命、六年七月三十一日理事長任命、八年四月十二日退任

清野長太郎　明治三十九年十一月二十六日理事任命、四十三年十一月二十六日重任、大正二年十二月二十六日退任

久保田勝美　同　右

犬塚信太郎　明治三十九年十一月二十六日理事任命、四十三年十一月二十六日重任、大正三年七月十四日退任

田中清次郎　明治三十九年十一月二十六日理事任命、四十三年十一月二十六日重任、大正三年一月十七日退任

野々村金五郎　明治三十九年十一月二十六日理事任命、四十三年十一月二十六日重任、大正三年三月二十五日退任

久保田政周　明治三十九年十二月七日理事任命、四十三年十二月七日重任、四十四年九月四日退任

岡松參太郎　明治四十年七月一日理事任命、四十四年七月一日重任、大正三年一月十七日退任

沼田政二郎　明治四十四年九月九日理事任命、大正三年一月十七日退任

○野村龍太郎　大正二年十二月十九日總裁任命、三年七月十五日退任、八年四月十二日社長任命、十年五月三十一日辭任

△伊藤大八　大正二年十二月十九日副總裁任命、三年七月十五日退任

川上俊彦　大正二年十二月二十六日理事任命、六年十二月二十五日重任、九年十月四日辭任

佃　一　豫　大正二年十二月二十六日理事任命、六年十二月二十五日退任
藤田虎力　大正三年三月二十八日理事任命、六年十二月十七日辭任
改野耕三　大正三年三月二十八日理事任命、七年三月二十八日重任、八年六月二十八日辭任
樺山資英　同　右
○中村雄次郎　大正三年七月十五日總裁任命、六年七月三十一日退任
龍居頼三　大正六年二月十四日理事任命、十年二月十四日退任
川村鉎次郎　大正六年九月二十六日理事任命、九年二月十六日辭任
久保要藏　大正六年九月二十六日理事任命、十年九月二十六日重任、十二年三月二十一日辭任
△中西清一　大正八年四月十二日副社長任命、十年五月三十一日辭任
△松本烝治　大正八年五月六日理事任命、十年五月三十一日副社長任命、十一年三月二十四日辭任
片山義勝　大正八年五月六日理事任命、十年十二月二十三日辭任
島安次郎　大正八年六月二十八日理事任命、十一年十月十四日社長事務取扱被仰付、同年十月二十四日社長事務取扱被免、十二年六月二十七日退任

中川儁藏　大正八年六月二十八日理事任命、十二年六月二十七日退任
杉浦儉一　大正九年二月十六日理事任命、十一年三月二十四日辭任
○早川千吉郎　大正十年五月三十一日社長任命、十一年十月十四日逝去
松岡洋右　大正十年七月四日理事任命、十四年七月四日重任、十五年三月十日退任
大藏公望　大正十年十二月二十三日理事任命、十四年十二月二十三日重任
赤羽克巳　大正十年十二月二十三日理事任命、十四年十二月二十三日退任
森俊六郎　大正十一年九月二日理事任命、十五年九月二日重任
○川村竹治　大正十一年十月二十四日社長任命、十三年六月二十二日退任
安藤又三郎　大正十二年三月二十一日理事任命
入江海平　大正十二年六月二十八日理事任命
梅野實　同　右
○安廣伴一郎　大正十三年六月二十二日社長任命
△大平駒槌　大正十三年十一月十一日副社長任命
岡虎太郎　大正十四年十二月二十三日理事任命
中橋徳五郎　明治三十九年十一月二十六日監事選任、四十二年十一月二十六日重任、大正元年十一月二十六日重任、四年十一月二十六日重任、五年十二月十三日

辭任

河上謹一　明治三十九年十一月二十六日監事選任、四十二年十一月二十六日重任、大正元年十一月二十六日重任、四年十一月二十六日重任、七年十一月二十六日重任、十年十一月二十六日重任、十三年十一月二十五日重任、十四年四月二十八日辭任

馬越恭平　同右、但大正十四年四月二十八日辭任ヲ除ク

岩下清周　明治三十九年十一月二十六日監事選任、四十二年十一月二十六日重任、大正元年十一月二十六日重任、四年六月四日退任

瀧兵右衛門　明治三十九年十一月二十六日監事選任、四十二年十一月二十六日重任、大正元年十一月二十五日退任

大橋新太郎　大正元年十一月二十六日監事選任、四年十一月二十六日重任、七年十一月二十六日重任、十年十一月二十六日重任、十三年十一月二十五日重任

小山健三　大正四年十一月二十六日監事選任、七年十一月二十六日重任、十年十一月二十六日重任、十三年十一月二十五日重任

佐々木勇之助　大正六年六月十六日監事選任、七年十一月二十六日重任、十年十一月二十六日重任、十二年十二月二十二日逝去

辭任

永田仁助　大正十三年六月二十一日監事選任、同年十一月二十五日重任

原富太郎　大正十四年六月二十日監事選任

現在の重役は左の如くである

社長	安廣伴一郎	副社長　大平駒槌
理事	大藏公望	理事　森俊六郎
同	安藤又三郎	同　入江海平
同	梅野實	同　岡虎太郎
監事	馬越恭平	監事　大橋新太郎
同	永田仁助	同　原富太郎

第七章　會社の職制

會社職制は業務開始當時は本社を部に分ち部の下に課を置き理事は各部を統一し各自其部に屬する事務を處理する所謂部制度であり明治四十年四月制定の左の如き本社分課規程がそれであつた

本　社

總務部　庶務課、會計課、用度課、監査課、土木課
調査部
運輸部　營業課、運轉課、建設課、港務課、工作課
鑛業部　地質課、販賣課
地方部　庶務課、衞生課

明治四十一年十二月職制の改正あり部を廢し各課長をして直接其課務を主宰せしめ理事は之を指揮監督すると共に社務全體を掌理する所謂合議制度となつた其分課規程に依り本社に庶務、調査、會計、用度、工務、運輸、鑛業、地方の八課が置かれた

然るに大正三年五月從來の合議制度を廢し各課所の上に部局を置き重役は各部局の事務を分擔し總裁之を統率する所謂部局制度が左の如き分掌規程に依つて定められた

本　社

總務部
　事務局―庶務課、課査課
　交涉局―第一課、第二課
　技術局―保線課、土木課、建築課
運輸部　營業課、運轉課
計理部　會計課、用度課
鑛業部　鑛務課、販賣課
地方部　地方課、衞生課

爾來數次に亘つて部局課所の廢合が行はれたが重役部長制は之を存置して大正十一年一月に至り社員部長制、重役合議制を採用して左の如き事務分掌規定を定めた

本　社

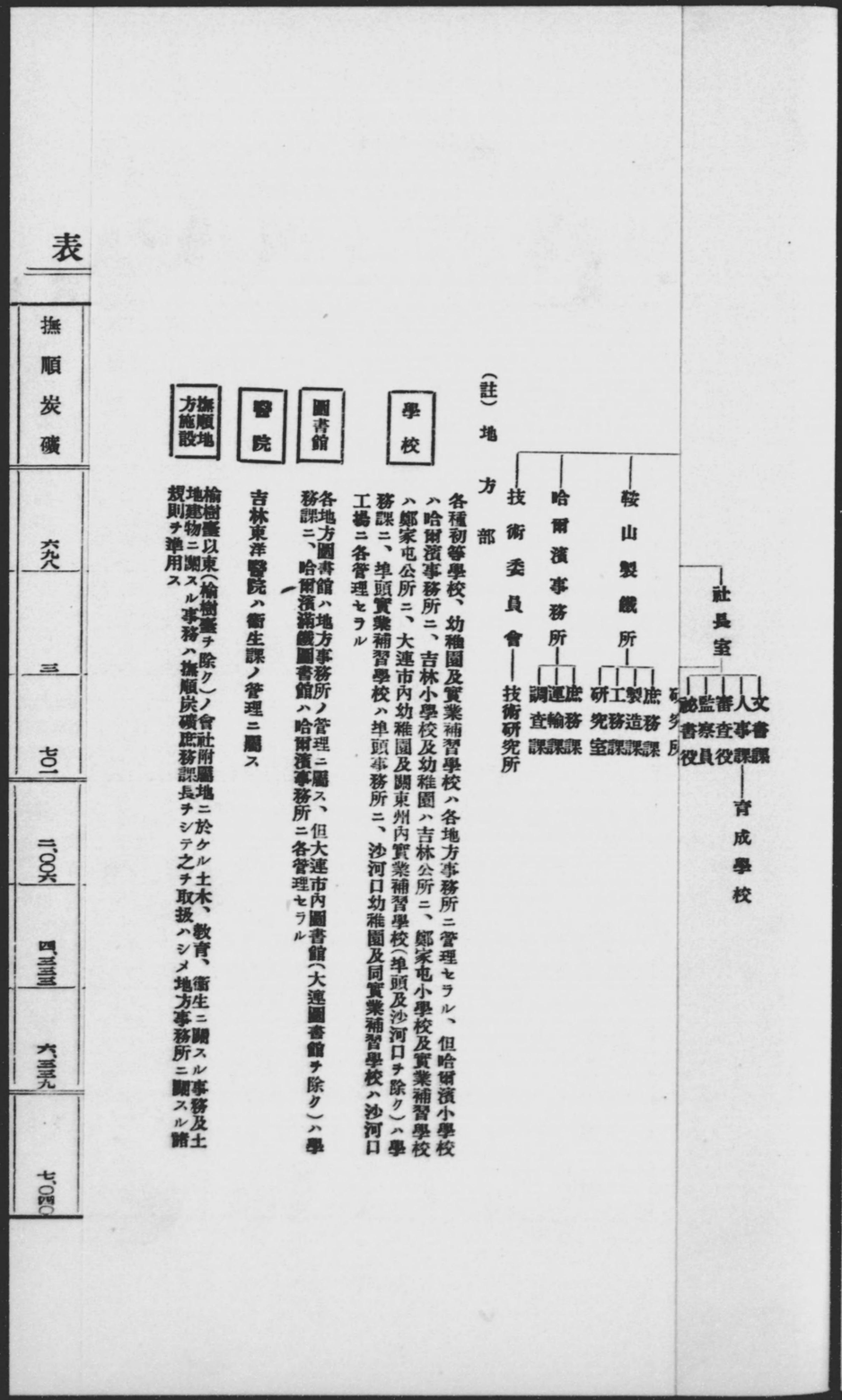
社長室　文書課、外事課、人事課、社會課、調査課、交通課、建築課、秘書役
運輸部　庶務課、旅客課、貨物課、運轉課、線路課、機械課
地方部　庶務課、土木課、學務課、衞生課、農務課
興業部　鑛務課、商工課、販賣課

用度課

經理部　主計課、會計課、用度課

大正十二年四月會社事務分掌規程を會社職制と改め本社に社長室及庶務、鐵道、地方、興業、經理の五部を置き所屬各課を設けて事務を分掌せしむることゝしたこれ現在の職制であつて其系統は次表の如くである

而して各部は本社の業務を分掌すると同時に地方所屬各機關を管轄し又各部、課竝各箇所には夫々箇所長を置き各其業務を總括せしめ尚必要ある箇所に次長又は箇所長代理を置き補佐又は代理せしむる

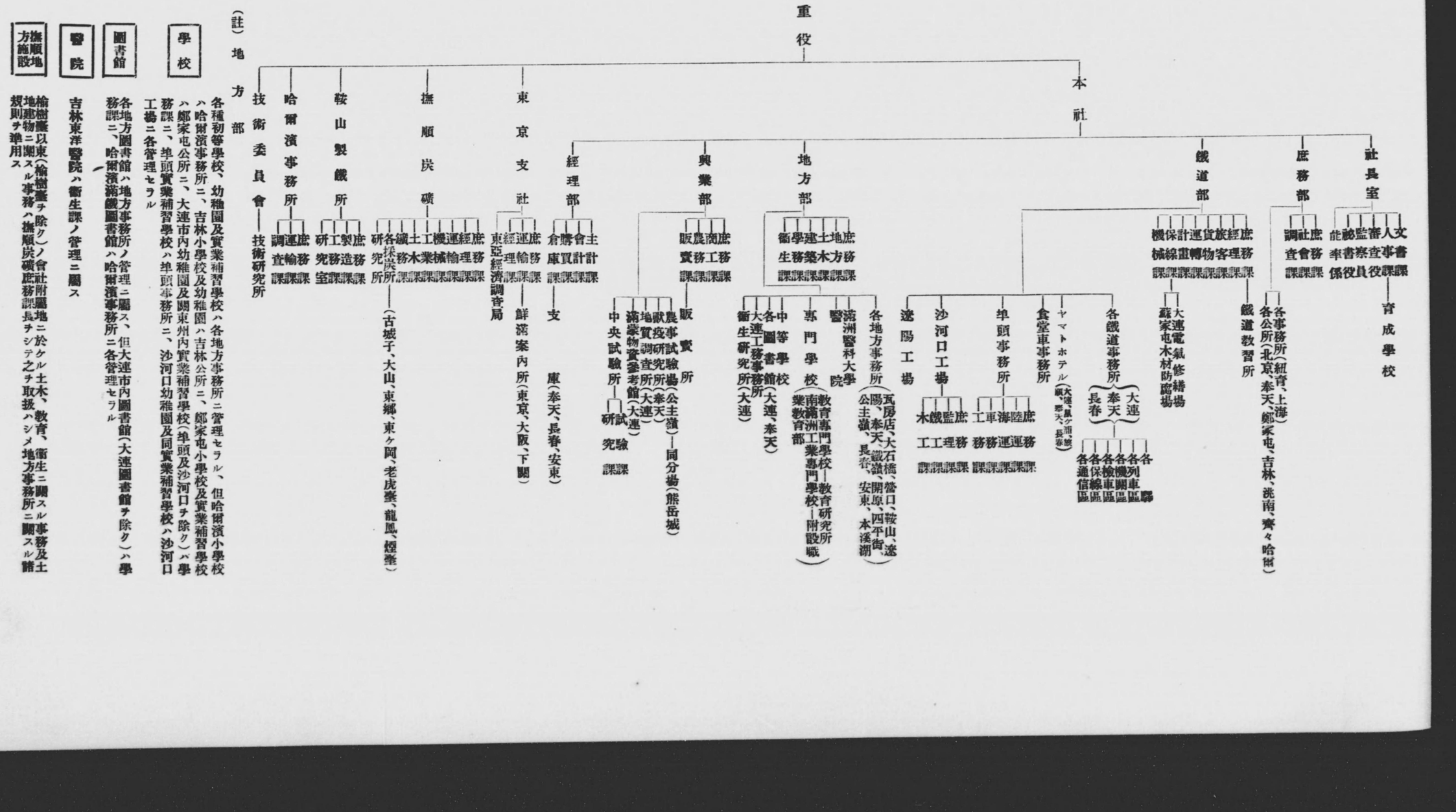


表

撫順炭礦	六九八	三	七〇二	二、〇〇六	四、三三五	六、三三九	七、〇四〇

南滿洲鐵道株式會社組織一覽

（昭和二年三月現在）



社員所屬別一覽表

（大正十五年九月末現在）

箇所別	職員			傭員			總計
	職員	囑託	計	日本人	支那人	計	
社長室	一九七人	一七人	二一四人	七二人	一人	七三人	二八六人
庶務部	二七四	三三	三〇六	一五六	六八	二二四	五三〇
鐵道部	四、六八二	一五	四、六九七	六、四七六	六、六〇二	一三、〇七八	一七、七七五
地方部	二、〇三六	七一	二、一〇七	一、七四一	一、二八一	三、〇二三	五、一二九
興業部	三一八	八	三二六	一四六	一一	二五七	五八三
經理部	二七七	一	二七七	二一四	三五六	四五〇	七二七
東京支社	六六	四	七〇	四〇	—	四〇	一一〇
撫順炭礦	六九八	三	七〇一	二、〇〇六	四、三三三	六、三三九	七、〇四〇
鞍山製鐵所	二三三	二	二三五	七二	一七二八	二、四四九	二、六七四
哈爾濱事務所	五三	一	五四	二七	一四	四一	九五
其他	二一		二一	二一	—	二一	四三
計	八、八四五	一五三	八、九九八	一一、六〇九	一四、三八四	二五、九九三	三四、九九一

（大正十五年九月末現在）

	鞍山製鐵所	哈爾濱事務所	其他	計
	二三五	五三	二	八八四五
	二	一		一五三
	二三五	五四	二	八、九九八
	七二	二七	二	一二、六〇九
	一、七二八	一四	一	一四、三八四
	二、四四九	四一	二	二五、九九三
	二、六七四	九五	四三	三四、九九一

第八章　東京支社其他

東京支社　會社は勅令により本社を東京に支社を大連に置くと定められたが業務開始後間もなく幹部は業務經營地に在つて事業の計畫監督等を一層敏活ならしむるを得策とし明治四十年三月勅令の改正を以て本社を大連に移した然るに會社の業務は又中央官憲其他との交渉多く且多數の株主は內地に在住するが故に之に關する事務は依然東京に於て取扱ふを便宜とし本社の移轉と同時に東京に支社を置くことゝし理事一名を駐在せしめて之に當らしむることゝし初め祕書庶務の二課を置きたるも大正四年二月庶務會計となし尙主事を置き理事をして之を指揮せしめた十一年一月新たに運輸課を設け運輸竝鮮滿案內に關する事務を掌理せしむることゝなし主事を改めて支社長を置き翌十二年運輸課を廢して鮮滿案內所となし大阪下ノ關に駐在員を置き鮮滿の旅行者に對し便宜を圖ることゝし後此兩地を案內所に擴張して再び本年一月運輸課の新設を以て是等の鮮滿案內に關する業務は他の運輸事務と共に統轄せしむることゝした而して東亞經濟調査局は元獨立して設けられたるも一時本社の管轄となり現在東京支社に之を隷屬せしめて居る

各公所　會社は又事業の性質上支那の官憲と交涉を要するもの頗る多く事業開始後奉天城

內に一公館を建築して其應接交涉の機關たらしむることゝし明治四十二年五月より之を滿鐵奉天公所と名付けた大正七年一月北京、鄭家屯に同年四月吉林に十一年七月齊々哈爾に十三年六月洮南の各地に公所を設け專ら其地方の中國官憲に對する交涉と經濟調査の任に當らしめた奉天を除く是等の地方は會社鐵道沿線を離るゝが故に學校教育の管理は便宜公所長をして之に當らしめてゐる

各事務所　會社は初め紐育に社員を駐在せしめ專ら米國に於ける經濟調査と會社事業の紹介をなしたが大正十一年十一月に至つて紐育事務所を設置した又哈爾濱事務所は大正六年二月より哈爾濱公所と稱し涉外事務と北滿の經濟調査に當らしめたるものを其後北滿の貨物集散の狀況調査と運輸聯絡等の交涉に當らしめて居つた哈爾濱運輸營業所と、十二年四月に至つて之を合併して現在の哈爾濱事務所となしたのである而して上海事務所は元埠頭事務所上海支所として明治四十四年九月以來同地に於ける埠頭事務を處理してゐたが大正十三年二月上海事務所と改稱し傍ら南支方面の經濟事情を調査せしめ十五年九月埠頭事務を大連汽船株式會社に依託經營せしむることゝなつて以來專ら會社事業の紹介と調査事務に當らしむることゝした

第九章　社員

社員

社員制　會社創立の際は官廳の制度に倣つて社員に祕書役、調査役、書記、技師、技手、雇等の役名を附したが明治四十二年一月之を廢してたゞ職員、傭人に區別し次で大正四年五月之を分つて職員、雇員及傭人(八年傭人を傭員と改稱)とした十三年三月全部の雇員を職員として雇員を廢し翌十四年八月別に職員中高級者に參事の稱呼を附することゝなつた

社員數の增減　創業の際鐵道提理部より引繼がれた從業員數は職員二千百八十名、傭人四千二百三十九名に過ぎなかつたが事業の進展に伴つて次第に增加し大正十五年九月現在數は職員八千八百四十五名、囑託百五十三名、日本人傭員一萬一千六百九名、中國人傭員一萬四千三百八十四名、合計三萬四千九百九十一名である

其間種々の必要より社員の淘汰を行ふこと數回就中大正九年六月に於て經費緊縮のため職員雇員二割、傭員一割五分の整理を斷行し解職者に對しては最高率の退職慰勞金及歸國旅費を支給し後顧の憂を少なからしめた

定員制　從前會社に定員制の定めなく從事員數は益々膨脹するばかりであつた會社は玆に

鑑みて定員制の必要を認め大正九年六月の整理と共に同月末現在員を以て暫定的定員とし爾來調査研究を累ね十三年三月職員定員規程を制定し各箇所の職員數を確定するに至つた

社員各年度末人員表

年度	職雇員及囑託			傭員			合計
	職員	雇員	囑託	計	日本人	中國人	計
明治四十年度末		二、九五三		二、九五三	六、一三五	四、一二九	一〇、二六四	一三、二一七
同　四十一年度末		二、七三九		二、七三九	四、八一一	四、四五六	九、二六七	一二、〇〇六
同　四十二年度末		三、二五一		三、二五一	五、五八九	六、二六七	一一、八五六	一五、一〇七
同　四十三年度末		三、八〇一		三、八〇一	六、九六一	七、二一〇	一四、一七一	一七、九七二
同　四十四年度末		三、九一九		三、九一九	七、三五六	八、二一二	一五、五六八	一九、四八七
大正元年度末		四、二三九		四、二三九	七、六六六	八、五七〇	一六、二三六	二〇、四七五
同　二年度末		四、六三九		四、六九三	八、二一三	八、九〇一	一七、一一四	二一、八〇七
同　三年度末		四、七一二		四、七一二	八、四二〇	九、六六三	一八、〇八三	二二、七九五
同　四年度末	二、三八一	二、二九七	三八	四、七一六	九、〇二五	九、八二七	一八、八五二	二三、五六八
同　五年度末	二、四五七	二、四四三	三五	四、九三五	九、七七六	一〇、五二六	二〇、三〇二	二五、二三七
同　六年度末	二、六二〇	二、八七九	四〇	五、五三九	一一、五八〇	一三、一八三	二四、七六三	三〇、三〇二
同　七年度末	三、一一〇	三、五一九	四九	六、六七八	一四、五六四	一六、八一九	三一、三八三	三八、〇六一
同　八年度末	三、六八〇	五、三〇九	七一	九、〇六〇	一五、八一八	一九、四一五	三五、二三三	四四、二九三
大正九年度末	三、八三三	五、四一一	七四	九、三一八	一二、五四〇	一五、一三五	二七、六七五	三六、九九三
同　十年度末	四、二九七	五、二〇八	七六	九、五八一	一二、〇五九	一四、七五七	二六、八一六	三六、三九七
同　十一年度末	四、七一九	四、六六三	九三	九、四七五	一二、〇四一	一四、六一四	二六、六五五	三六、一三〇
同　十二年度末	四、九五九	四、七九三	一二九	九、八八一	一二、二三〇	一五、五六三	二七、七九三	三七、六七四
同　十三年度末	九、六七四	—	一二七	九、八〇一	一二、五二一	一六、三二六	二八、八四七	三八、六四八
同　十四年度末	九、〇六四	—	一四二	九、二〇六	一二、二二〇	一四、八二〇	二七、〇四〇	三六、二四六

社員の養成

鐵道教習所　會社は鐵道教習所(元鐵道從事員養成所と稱す)を大連に設け普通學及鐵道に關する諸般の智識技能を與へ有能なる從事員の育成に努めてゐる本所には本科、別科及講習科を置き六箇月乃至一年の修業を以て實務に就かしめてゐる

育成學校　會社は其使用する見習に對し將來社員たるに必要なる教育を施す目的を以て明治四十年七月創設せられ晝間は會社事務を見習はしめ夜間學業を授けてゐたが大正十二年八月之を改めて晝間學校とし見習夜學校の名稱を育成學校に改め半日交替の二部教授制度を採用し修業年限を四年六箇月とし四箇年は主として學科を修得せしめ六箇月は專ら實務的訓練を與へ卒業後滿四箇年會社の指定する職務に從事する義務を負擔せしめてゐる尙此育成學校の外社員の養成機關として之に類するものに撫順炭礦坑內係員養成所、沙河口職工見習養成

所、看護婦養成所、速記タイピスト養成所等がある

一般給費學生　大正七年社員貸費修學生の制度を設け一定の條件を具有する社員を選抜し學資を貸與して內外の各學校に入學せしめ卒業後一定期間在職する時は貸與學費の返納義務を免除することゝして來たが十五年八月之を改めて給費學生とし勤續一年以上の社員にて專門學校又は同程度の教育を受けんとする者の中より詮考指定し毎年十名以內を各學校に派遣修學せしめ卒業後は修業年限の二倍に相當する期間會社の指定する職務に從事する義務を負擔せしむることゝした

海外派遣給費學生　會社の命に依る外國留學の外勤續二年以上の社員中の優秀者を海外に派遣し之に勉學の機會を與ふる爲大正七年此制度を設け毎年五名以內を事務、技術、敎育、醫院の各方面より選拔派遣することゝしてゐる

東亞同文書院及日露協會學校給費學生　大正九年より勤續一年以上の中等學校卒業程度の社員竝在滿中學校甲種商業學校生徒にて學校長の推薦に係る者より選拔し東亞同文書院に五名以內、日露協會學校に三名以內を派遣してゐる當初は內地中等學校よりも募集したが後之を改めて在滿の制限を附することにした

北京留學生　大正十一年より勤續一年以上の社員にて專門學校以上の學校卒業者、語學檢定試驗華語二等以上に合格した者及會社に於て特に必要と認めた者より毎年五名以內を選拔して華語及一般中國事情研究の爲北京に留學せしめてゐる

新採用社員に對する講習　大正十三年度より新たに採用した專門學校以上の學校を卒業せる社員に對して毎年度始、會社事情の概略を知得せしむる爲講習會を開き各箇所の專門家をして各種業務の講演をなさしめ又翌十四年度より入社後一箇年間毎日一二時間華語の講習を受けしめてゐる

職員資格試驗

職員の資格及登格標準に就ては從來別に明確なる規定はなかつたが定員制が施行せられてより必要上大正十四年五月職員資格試驗規程を設け滿二箇年以上勤續の傭員には所屬箇所長の推薦によつて受驗資格を與へ其向上心を誘發してゐる

社員表彰

社員中操行職務成績共に一般の模範たる者、操行成績共に良好なる多年勤續者、會社業務に關する事故又は災害の防護救濟に功勞ある者、會社業務に就き有益なる改良又は發明を爲した者、其他功勞者、篤行者等を表彰する爲大正十一年八月社員表彰規程を制定し會社創業記念日に於て定期に又必要に應じ隨時に是等の者に對し表彰狀、功績狀、賞金の授與及賞詞を以て表彰して

ゐる

非役及待命

非　役　従來社命に依り直接會社に屬せざる業務に從事する社員に對しては之を豫備員若くは派遣員としたが大正十年十二月社員非役規程を制定し其待遇を統一した

待　命　大正十一年十一月社員待命規程を制定し退職社員優遇の爲一箇年以內の待命を與へ得ることゝし其間在職と略同樣の給與を以てし突然失職の境遇に陷ることなからしむる方法を講じてゐる

第十章　社員の待遇及福祉施設

俸給手當及賞與　社員の待遇に就ては一定俸給の外手當及社宅を支給し又一年二期に賞與を給するを原則となつてゐるが歐洲大戰以來物價の騰貴は社員の生活を脅威することが甚しかつた爲會社は數次臨時手當を支給して其生活の安定に努めたが大正八年十月全社員に對し各本俸に在勤手當又は特別手當を加へたものゝ一割五分乃至五割を增給した

此給與改正と共に家族手當支給の制を設け社員の資格及家族員數に應じて日額又は月額に依り之を支給したが其後大正十四年度より本俸百五十圓未滿の者のみに對し此制度を適用することゝなつた

又大正八年十二月列車乘務員に乘務手當支給の制を設けたのを始めとして諸種の職務手當を支給して現業員待遇上遺憾なきを期しつゝある

在勤手當は會社創業以來在滿邦人職員に對して總て本俸の十割を給する規程であつたが漸次變遷する事情に鑑み明治四十五年四月一般に俸給を增額して特定地を除く外在勤地の如何に拘はらず資格給額に應じ五割乃至六割を支給したが大正八年十月在勤地に應じて支給率を加減し之を五割乃至十八割と四割乃至十七割の二種に區別して支給することゝなつた又傭員に對しても之に準じ相當率で在勤手當を支給してゐる

會社は又中國人傭員の給料に關して常に意を用ゐ彼等の實際生活に適應する給與をなさんが爲大正八年十一月從來の金建金拂制度を銀建に改め之を其月の小洋銀對金の平均相場に依り金を以て支給した然るに其後銀價の低落甚だしく再び生活の不安に陷つた爲其緩和策として十年三月差當り臨時手當を支給し且彼等の金銀兩貨幣使用の實際を研究した結果一定の銀對金換算額を定めたる上三分の一額は金銀同價とし三分の二額は市場相場に依ることに改正した尙十四年八月以降は小洋銀百圓に付金一圓の割合を以て兩替手數料を支給することゝなつた

退職手當　會社は創業と同時に退職慰勞金の制を定めたが明治四十五年四月及大正九年五月の二回に亙つて內規を制定し後又改正して其支給額を增率したが尙十年十二月に至つて社員退職慰勞金規程に改正するところあり其最終俸給額を標準として其支給額を定め以て著しく之を增額した

語學奬勵金　大正十一年十一月語學奬勵金支給規程を制定し華語、露語及日本語に就き每年檢定試驗を施行し其合格者に對し奬勵金を與へ語學修習を奬勵しつゝある

休暇及忌引　一般慣習に基く休日の外職員特別休暇內規を設けて職員には一箇年十二日の休日を與へ心身の休養と共に歸省展墓の餘暇を得せしめ尙婦人社員出產前後休暇規程（大正十一年五月）社員忌引內規（大正三年九月）等を制定し夫々相當の休暇を與へてゐる

社員傷病死亡手當　職務に起因して死傷した場合の手當支給に就ては明治四十年十二月始めて社員死傷手當金給與內規を制定したが大正四年十月社員共濟規程の實施に伴つて改正を加へ其後十年十二月之を改めて社員傷病死亡及退職手當とし危險なる業務に從事する社員に對し後顧の患なからしめんことを期し又中國人傭員の退職手當及死傷手當は十四年八月より日本人傭員と同一率に改正した其他社員死亡の場合は一定の弔慰金を支給することにしてゐる

社員貯金　明治四十年十月貯金規程を設け社員の隨意貯金を奬勵し會社は現在百圓に付日歩貳錢貳厘の利息を附してゐる

身元保證金　明治四十二年六月身元保證金規程を制定し社員に對して身元保證の意味を以て一定の金額に達する迄每月俸給、給料竝賞與金中より積立をなさしめ之に對し現在百圓に付日歩貳錢四厘の利息を附してゐる

社員共濟制度　當初は各所屬課所に於て夫々小規模なる救濟機關を設けたが其實績の見るべきものがなかつたのに鑑み大正四年六月社員共濟規程を制定し唯特殊事情を有する撫順炭礦所屬傭員救濟組合は一時之を除外して來たが九年四月以後之を併合し爾來給與種目を增加し各般の規定に亙つて改正を加へ現在に及んでゐる共濟基金は加入社員の一定率の醵金と之と同額の會社補助金及基金利子とを以て之に充て現行給與種目は社員治療料、社員入院料、扶

助金、特症手當金、特症旅費、病傷救濟金、弔慰金、罹災金、年功金、家族治療料、家族入院料、家族葬祭料の十二種である大正十四年度末に於ける共濟加入社員數一萬九千四百九十六名、醵金額七拾參萬六千六百四拾六圓であり同年度中の救濟件數一萬三千八百四十四件、救濟金額八拾五萬四千貳百六拾五圓である

中國人社員の共濟制度に關しては種々の事由によつて實施の機運に達しなかつたが會社は極力各般の調査を進め大正十四年十月新たに中國人傭員互助共濟規程を制定し同年十一月十六日より之を實施することゝなつた加入社員は中國人傭員全部（但鞍山製鐵所所屬傭員は本年一月より加入）より成り其掛金と之と同額の會社補助金及基金利子を以て互助共濟基金とし加入社員の病傷（公傷を除く）に因る損害は盡く之を補塡することゝしてゐる大正十四年度末現在の共濟社員總數一萬二千六百一名、掛金額貳萬參百五拾參圓、給與件數九百五件、給與金額壹萬參千貳百拾壹圓である

共濟基金貸付制度は共濟制度に附帶する內規として取扱はれてゐたが大正十四年四月より規程を以て實施せられた卽ち社員又は其家族が疾病其他の事情によつて生計上著しく窮迫に陷つた場合其危急を救はんが爲共濟基金より貸付をなすのである但共濟社員は他の社員より低利の貸付を受くる特典を有し貸付額は身元保證金の範圍內に於て貳千圓以下とし三十箇月以內に月賦償還をなさしめるものである

社宅　政府より引繼當時の社宅數は附屬家共千四百四十六棟、建坪三萬八千八百七十八坪で大連、瓦房店、大石橋、遼陽、公主嶺には露國の建物が比較的多く殘存したが當時の社員六千四百十九人を收容するには不充分であり配給標準は高級者にあつても僅に一人三坪當り、一般社員に對しては一坪當りであるに過ぎなかつた玆に於て會社は明治四十一年大連近江町に社宅三十棟を新築したるを始めとして爾來社宅の建設は會社土木業務の要部を成し大正十四年度末現在全線に亙つて施設せるもの獨身社宅、家族持社宅を合せて七千三百三十棟（附屬家を含む）、建坪五十二萬六千二百五十五平方米（十五萬九千四百七十坪）である尙會社は在滿企業家をして住宅を建築せしめ會社が之を借受けて代用社宅として使用するもの其數三千五百餘戶に上つて居る又散宿制度をも併用して之に對し住宅料を支給し孰れも待遇上の公平を圖りつゝある又會社は在滿社員中住宅を新築せんとする者に對して住宅組合を組織せしめ其資金借入に對して一定額の保證を與へ社員の生活の安定を圖つてゐる

獨身社宅は專ら靑年獨身者をして共同生活を營ましめ舍員相互の自治を本義とし寮母又は男子事務員を置いて便益と慰安を與へてゐる大正十四年度末獨身社宅棟數五十三、建坪三萬一千四百十一平方米（九千五百十九坪）、收容獨身社員現在二千三百十六名である

敎化慰藉事業　社員の敎化と慰安に對しては會社は草創の際より深く意を用ゐたところあり知名の士に依囑して講演會、講習會、夏期大學等を催し滿鐵讀書會（元滿鐵自修會と稱す）を組

織して毎月一回雜誌を刊行し社員の研學修養に資してゐる大正十一年大連に家庭研究所を設けて婦人の爲講習指導をなし又沿線地方に對する講師の派遣斡旋に力めてゐる又慰藉係を設けて慰安修養其他興行的催物を計畫し十年六月慰安車の制度を設けて中間小驛の社員並家族慰安の目的を以て車内に特別の裝置裝飾を加へ娯樂機關を具へ夜間は活動寫眞を映寫し尚消費組合の販賣店を併置して物資購買の便宜を圖つてゐる其他隨時活動寫眞を映し童話會を催し又兒童遊園を設置し或は老人慰安會を開く等周く意を用ゐてゐる趣味向上の爲には音樂、寫眞、園藝等に關する各種の會合を催さしめ又人事相談所を設け家庭、結婚、住宅、生計等の相談に應じ社員の日常生活の不安なからしむることに力めてゐる

社員倶樂部　會員相互の親睦修養慰安の機關として會社は會員百名以上を有する地域に對して其建物及設備を無償で貸與し會員の自治に委ねてゐる現在では大連の十箇所、撫順の十四箇所を始めとし各地方の分を合せて五十二を算してゐる此外沿線中間驛所在地には集會室を設け如上の目的に副はしめてゐる

滿鐵婦人協會　本會は大正十三年四月發會式を擧げ相互の親睦と修養とを圖るを主旨とし倶樂部を組織し講習講演體育運動又は見學旅行等に活動する外雜誌を發行し身心兩方面の發達に力めてゐる

運動施設　會社は又社員の體育奬勵と精神修養を目的として滿鐵運動會を組織し本部を本社に、支部を各地方事務所所在地に設置してゐる而して本支部には陸上競技、柔道、劍道、弓道、野球、庭球、蹴球、水泳、氷滑、馬術、漕艇の各部を置き之に伴ふ諸般の設備をなし毎年各地に於て陸上運動會を開催し又各部に特別補助金を交付して社員の外市民一般の體育にも便宜を與へ其向上と涵養に力めてゐる

消費組合　會社は沿線各地の社員に日用品を供給する爲明治四十年八月調辨人に請負はせ之を調達せしめたが其後四十三年十二月調辨所の組織となし更に大正八年十月消費組合を設立するに至つた其當時は會社に附屬する一の機關であつたが十四年四月之を獨立せしめて社員の自治的組織に變更し現在に於ては資上高八百萬圓に近き成績を擧げ其組合員總數は約二萬五千人其家族數を合すれば約七萬人に上つてゐる

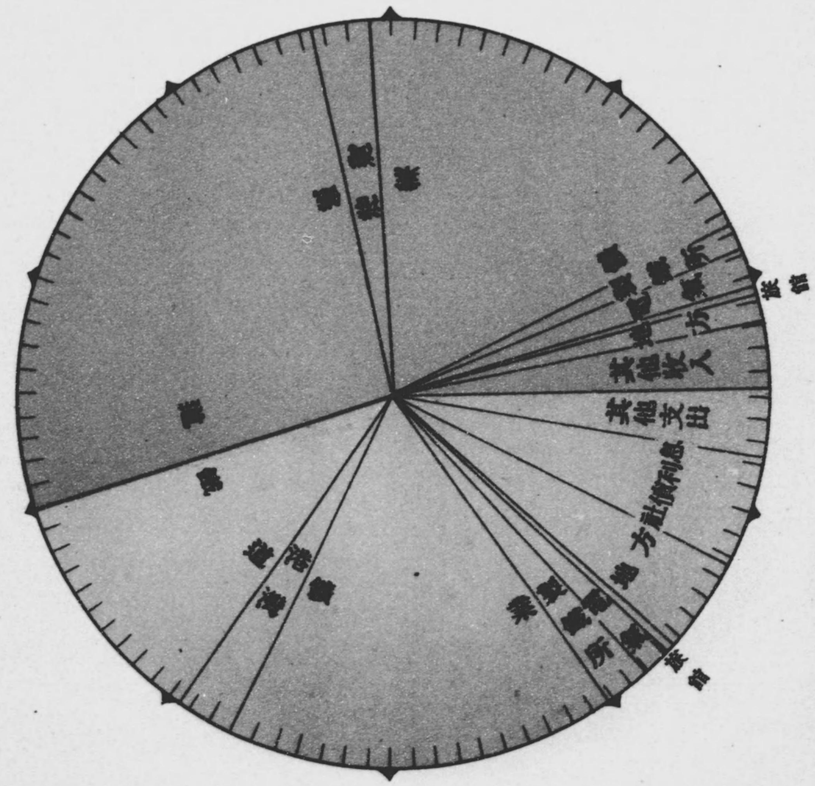
滿鐵社員會　大正十四年十月社内各學校同窓會代表者相會して滿鐵社員會の設立を發起して其他の各團體代表者に加入を勸誘し十五年二月、二十二團體代表者の名を以て會社に對し正式に社員會設立認可を願出でた、本會は「自主獨立ノ精神ヲ涵養シ自律自治ノ修養ヲ積ムコト、會社ノ使命ニ立脚シ其ノ眞正ナル地位ヲ擁護スルコト、會社ノ健全ナル發達ヲ基調トシ社員共同ノ福祉ヲ增進スルコト」の三綱領を以て社員が會社の使命と利益に對し一の團體として發達貢獻せんとする主旨であるから會社は之を認可した發起人等は直ちに社員會設立準備委員會を組織し全社員に向つて其趣旨を說明し同年八月迄に一萬八千三百五十名の加入者を見るに

第十章　社員の待遇及福祉施設

至り九月十五日評議員の選擧を行ひ續いて幹事長以下役員を定め十二月六日第一回評議員會を開催した

營業收支割合

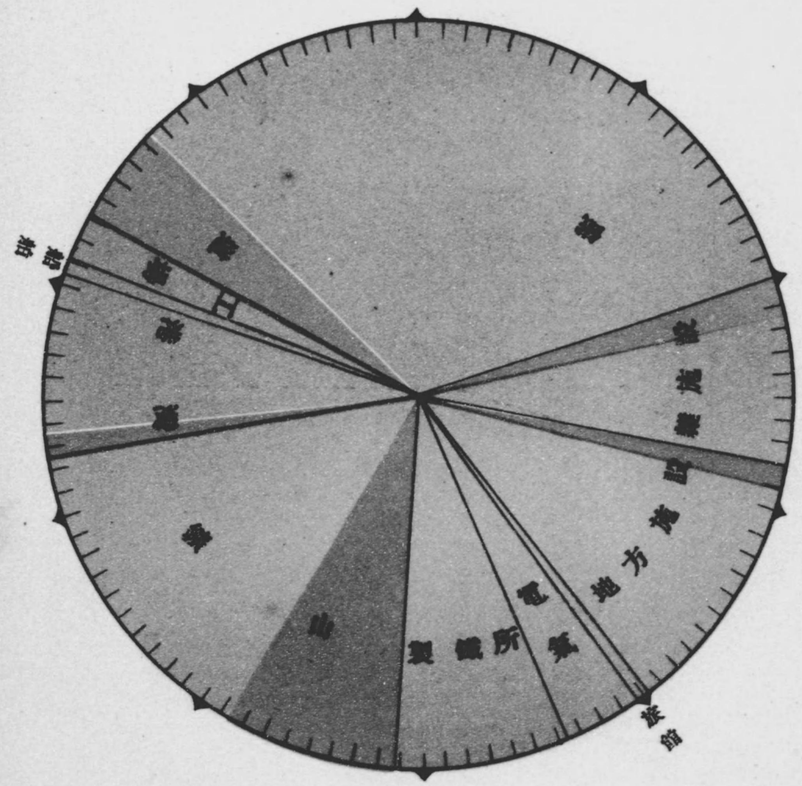
大正十四年度



收入　支出

事業費割合

自明治四十年度
至大正十四年度



純投資額　政府出資財産評價額

營業收支割合

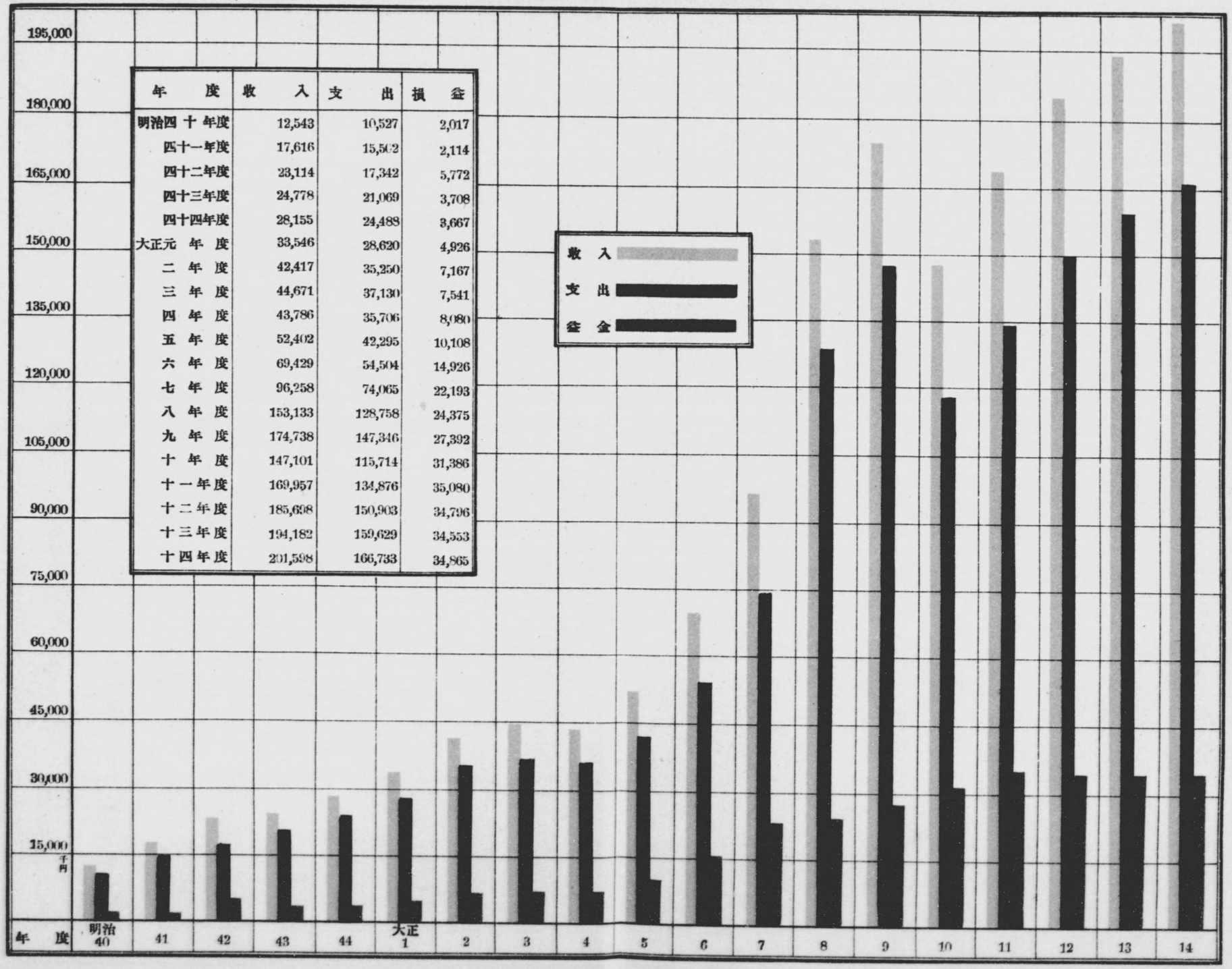
大正十四年度

興業費事業別割合

自明治四十年度
至大正十四年度

營業收支累年比較

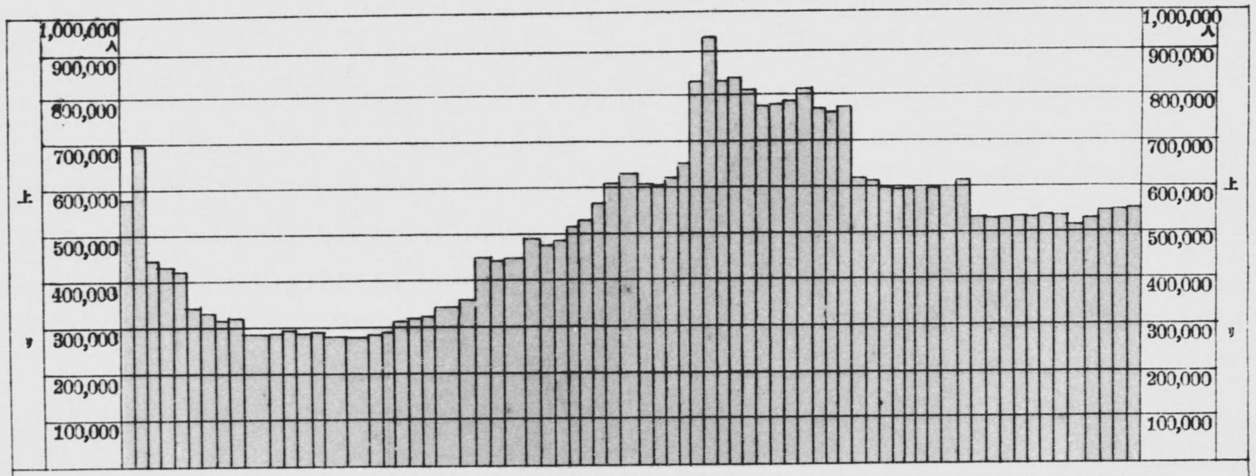
年度	收入	支出	損益
明治四十年度	12,543	10,527	2,017
四十一年度	17,616	15,502	2,114
四十二年度	23,114	17,342	5,772
四十三年度	24,778	21,069	3,708
四十四年度	28,155	24,488	3,667
大正元年度	33,546	28,620	4,926
二年度	42,417	35,250	7,167
三年度	44,671	37,130	7,541
四年度	43,786	35,706	8,080
五年度	52,402	42,295	10,108
六年度	69,429	54,504	14,926
七年度	96,258	74,065	22,193
八年度	153,133	128,758	24,375
九年度	174,738	147,346	27,392
十年度	147,101	115,714	31,386
十一年度	169,957	134,876	35,080
十二年度	185,698	150,903	34,796
十三年度	194,182	159,629	34,553
十四年度	201,598	166,733	34,865



各驛旅客通過數量圖

大正十四年度

鐵道



大沙河南大金二三石普 印瓦王得松 馬 許九熊麗沙蓋 太大分他 海南湯干鞍立首達張壇十法蘇軍奉文皃新新衛得鐵平中開金馬昌隔泉雙桓虹四楊十郭蔡大公劉陳范大孟長

河水關房 十十里 關 房 利 家 家 岳家 平石 崗 蓋 景 家 官石減蓋石許 頂 溝仲 廟勾牛平木家家 輸主房家家 家

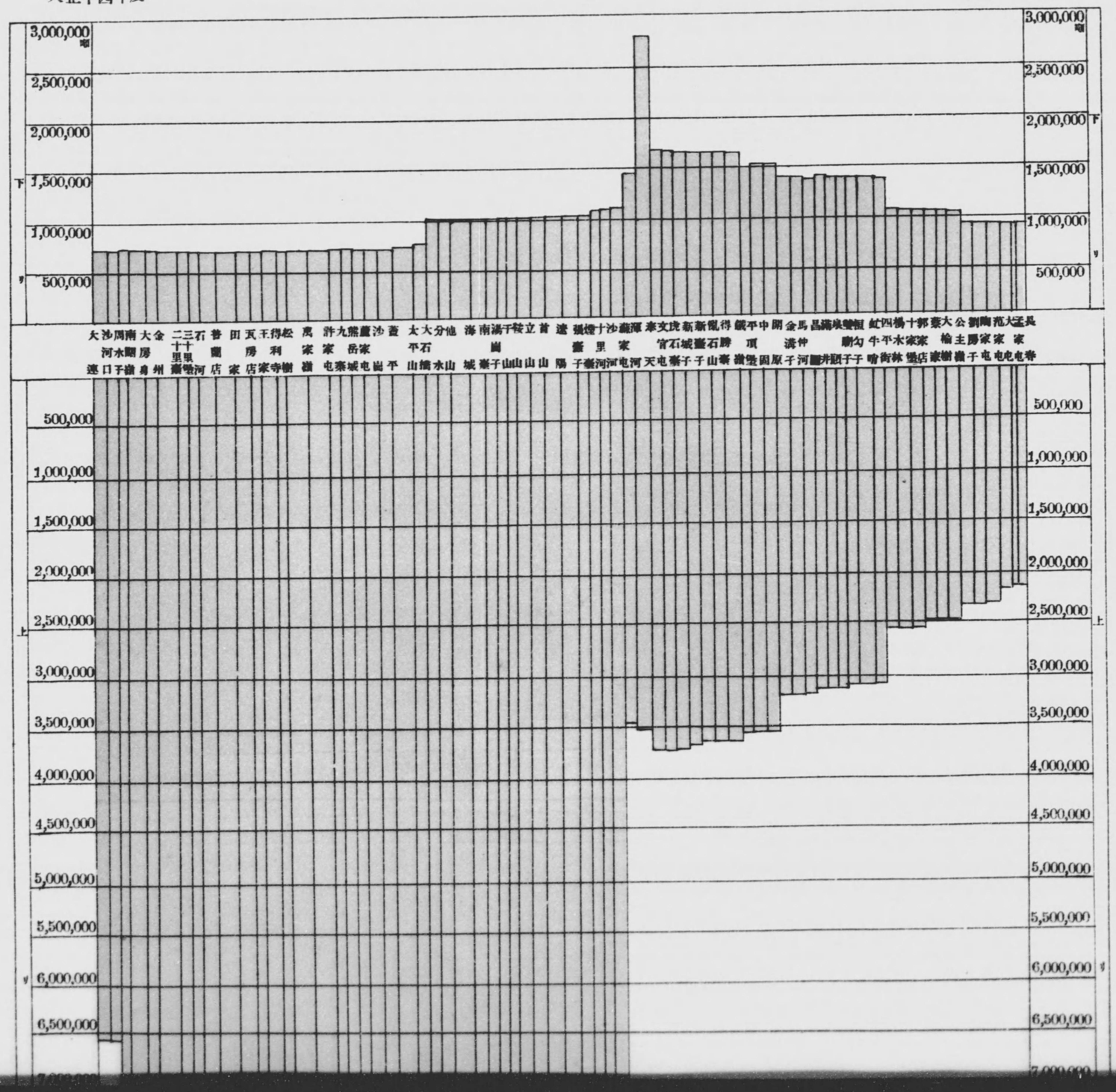
連口子鎮魚州蓋堡河店 家店家寺樹 禮 屯寨城屯崗平 山橋水山 城蓋子山山山山陽子蓋河咀咀天屯寨子子山寨蓋堡鎮子河鹽井子子晴街林堡店寺樹樓子屯屯屯屯普

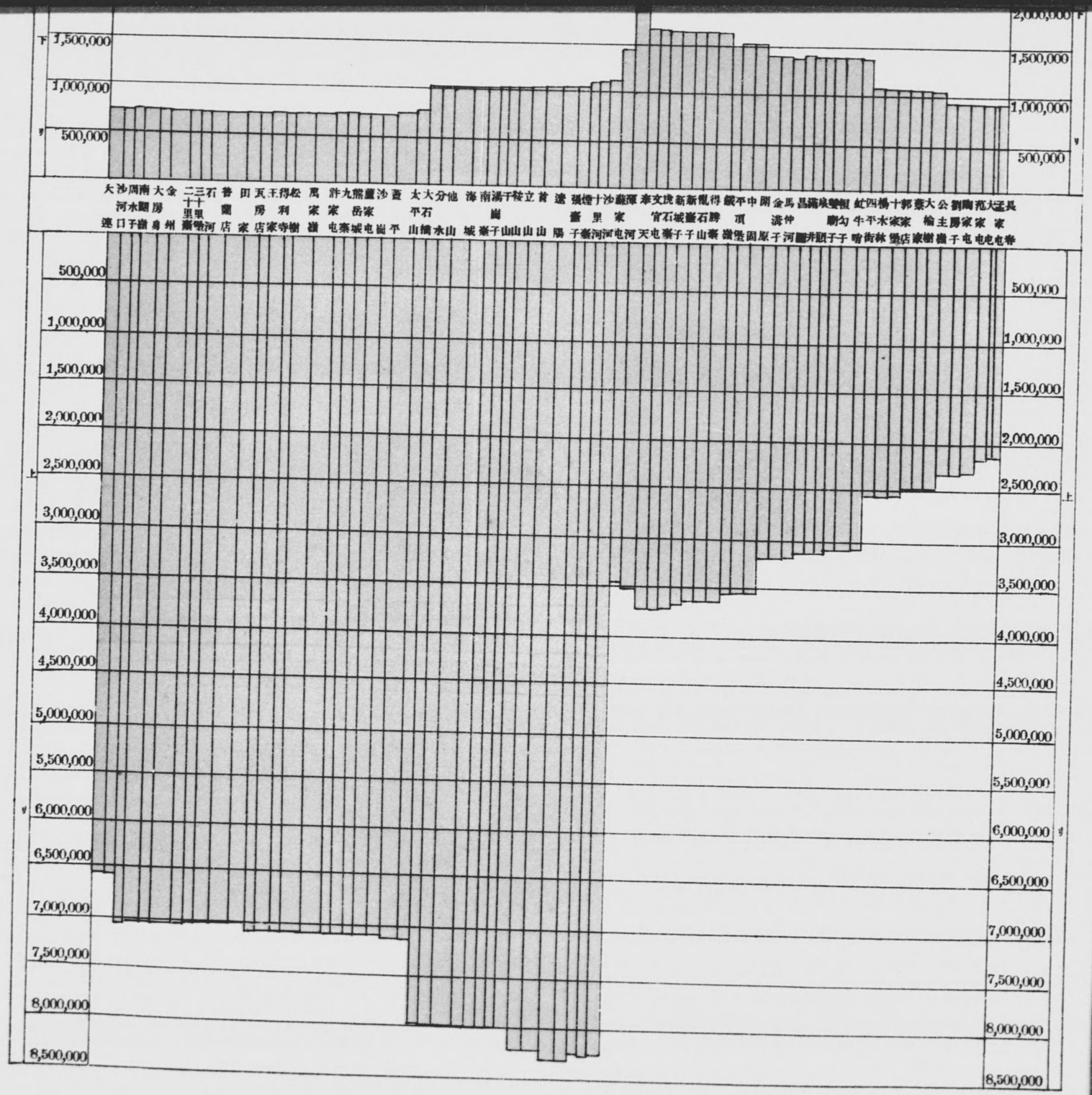
4,500,000
5,000,000
5,500,000
6,000,000
6,500,000
7,000,000
7,500,000
8,000,000
8,500,000

各驛貨物通過數量圖

大正十四年度

鐵道





下
1,500,000
1,000,000
500,000
2,000,000
下
1,500,000
1,000,000
500,000
大沙河口
沙河口
周水子
南關嶺
大房身
金州
二十里臺
三十里堡
石河
普蘭店
田家
瓦房店
王家
得利寺
松樹
萬家嶺
許家屯
九寨
熊岳城
蘆家屯
沙崗
蓋平
太平山
大石橋
分水
他山
海城
南臺
湯崗子
千山
鞍山
立山
首山
遼陽
張臺子
燈臺
十里河
沙河
蘇家屯
渾河
奉天
文官屯
虎石臺
新城子
新臺子
亂石山
得勝臺
鐵嶺
平頂堡
中固
開原
金溝子
馬仲河
昌圖
滿井
泉頭
雙廟子
桓勾子
虹牛哨
四平街
楊木林
十家堡
郭家店
蔡家
大榆樹
公主嶺
劉家
陶家屯
范家屯
大家屯
長春
500,000
1,000,000
1,500,000
2,000,000
2,500,000
3,000,000
3,500,000
4,000,000
4,500,000
5,000,000
5,500,000
6,000,000
6,500,000
7,000,000
7,500,000
8,000,000
8,500,000
上
500,000
1,000,000
1,500,000
2,000,000
2,500,000
3,000,000
3,500,000
4,000,000
4,500,000
5,000,000
5,500,000
6,000,000
6,500,000
7,000,000
7,500,000
8,000,000
8,500,000
上

第二編　會社の事業

第一章　鐵道業

鐵道業は會社の主腦事業であつて過去二十年間會社は其主力を此方面に傾注し鐵道の建設、設備の整頓と共に運輸狀態の改良發達を圖り同時に附帶事業として倉庫營業を開始し他方に於て工場の完成と共に車輛の充實に力を盡してきたのである

今鐵道竝是が附帶事業に關し其創業から大正十五年九月末に至る變遷推移の大要を記し以て其全豹を窺ふことゝする

第一節　鐵道

會社鐵道は大正十五年九月末に於て大連、長春間の幹線四百三十八哩五及周水子、旅順間三十一哩六、大石橋、營口間十三哩九、煙臺、煙臺炭礦間九哩七、渾河、楡樹臺間二哩五、蘇家屯、撫順間三十二哩九、瓢兒屯、千金寨間四哩、蘇家屯、安東間百六十一哩七の各支線を合し六百九十四哩八となるが此他大房身、柳樹屯間の未開業線三哩六を合すれば總延長六百九十八哩を算する

(一)　建　設

會社が明治四十年四月一日政府から引繼を受けた鐵道は左記の諸線である

大連、孟家屯間	四三一哩七八鎖八三節
旅順線(南關嶺、旅順間)	二九哩五〇鎖一〇節
柳樹屯線	三哩四六鎖五六節
營口線	一三哩三〇鎖八四節
煙臺炭坑線	九哩五六鎖一〇節
撫順線(蘇家屯、老虎臺間 渾河支線及楊柏堡支線)	三七哩二五鎖七一、六節
安東縣、奉天間輕便鐵道	一八四哩一六鎖二一、二節

更に明治四十年七月露國政府から左記線を引繼いだ

孟家屯、寬城子境界間	五哩二二鎖一三節

玆に於て結局會社が引繼を受けた鐵道は

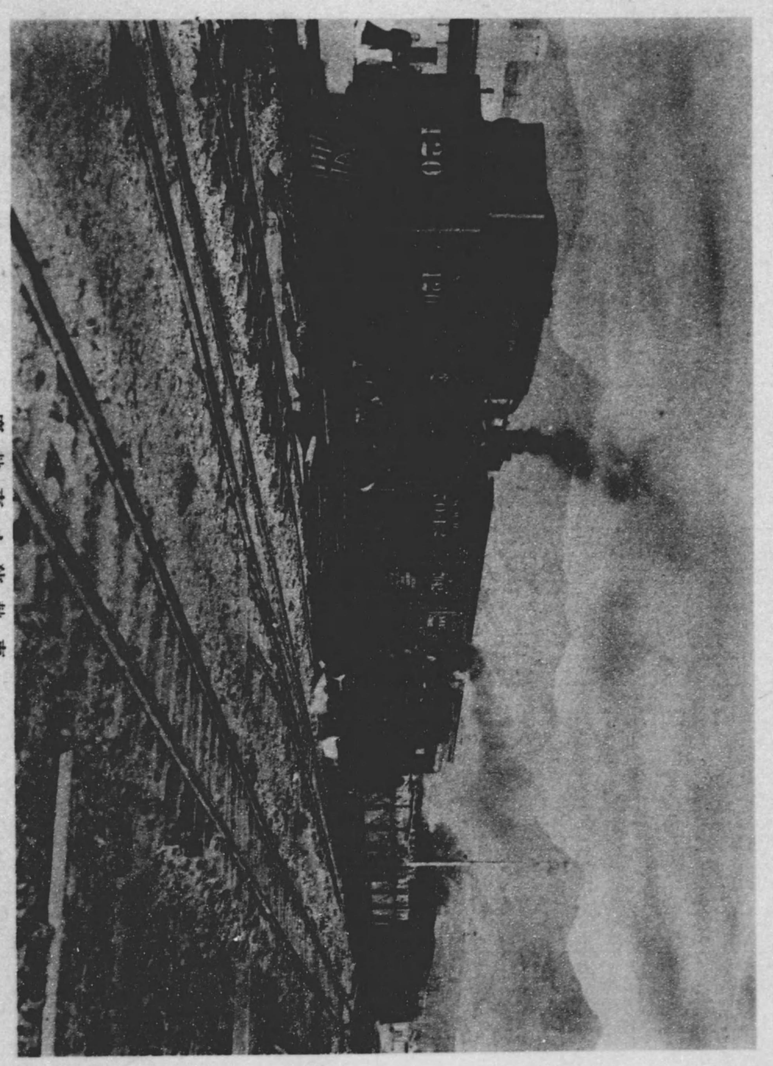
合　計　換　算　六七七哩七七

尙前記の內安奉線の軌間二呎六吋の輕軌道を除き他は總て三呎六吋の狹軌式である

右の外奉天、新民屯間の鐵道も一時其管理を會社に委託せられたるも後ち淸國政府に引渡した

以下建設工事に就き順次叙述する

イ　廣軌改鑄工事　東淸鐵道時代の軌間は五呎であつたが我軍之を占領すると同時に三呎六吋に改修した會社は明治三十九年八月の政府命令書に依り營業開始の日から起算し滿三箇年以內に四呎八吋半の廣軌式に改築し且大連、蘇家屯間二百三十八哩は複線と爲すの命令を受けたので引繼を受くると共に先づ之が計畫及準備に從ひ安奉線を除き明治四十年五月初めて本線及支線の擴軌事業に著手し狹軌鐵道の運轉を休止せずして擴軌改築を進行せしめんとしたるが爲非常なる苦心をなし其結果在來の狹軌の外側に尙一本或は二本の軌條を加へた三線式又は四線式狹廣軌併用運轉法を採用することゝしたのである就中最も苦心したるは其軌道分岐點であつた斯樣に頗る複雜な作業も著々工を進め旅順支線旅順、大連間三十八哩九鎖先づ成り明治四十年十二月一日始めて廣軌列車の運轉を行ひ次で本線に於ても工事大に進捗し大連、瓦房店間六十六哩九鎖は明治四十一年一月二十二日、瓦房店、遼陽間百四十一哩一鎖は同年二月十三日、遼陽、奉天間四十哩七鎖は同年三月十四日孰れも試運轉を擧行し良好の結果を得た奉天以北は材料の延著に加ふるに寒威に苦められたるも克く萬難を排して工事の進捗に努め一度材料が到著するや晝夜兼行速に之を完了し奉天、鐵嶺間四十三哩八鎖は同年四月十八日、鐵嶺、公主嶺間百六哩五鎖は同年四月二十九日、公主嶺、長春、西寬城子間四十哩一鎖は同年四月三十日を以て試運轉を擧行し孰れも良好の成績を擧げた次で撫順支線三十二哩四十六鎖及營口支線十三哩四鎖は狹廣軌列車移替の際殆ど一氣に竣成した更に本線及撫順、營口兩支線共竣工を告



廣軌車と狹軌車

げ明治四十一年五月三十日全線廣軌列車の開通を見るに至つた、これが今日九百萬人の旅客と一千六百萬噸の貨物を輸送し更に四隣の鐵道と運轉の聯絡をなし得る基となつたのである廣軌改築工事に要した金額は車輛費及機械場費を除き金八百九拾貳萬六千貳百四拾貳圓であつた

□　安奉線改築工事　本線は當初日露戰役中我第一軍の軍器糧秣を輸送するの目的で建設せられた輕便鐵道であつた然るに其後戰爭の終結と共に一時的の軍用鐵道は變じて永久の平和的交通機關となるに及び會社は明治四十年四月一日野戰鐵道提理部から本線の引繼を受けた玆に於て會社は明治三十九年八月一日附の政府命令に依り會社經營に移つてから三箇年以內に本線を軌間四呎八吋半の標準軌道線路に改築すべき事となつた而して是が改築に當つては清國の特派する委員と商議する必要があつたので明治四十二年一月から左記の如く協商した

1　清國官憲との協商顚末　會社設立に際し我帝國政府から會社に與へられた命令書中最も急を要した事項は大連、長春間の軌道改築と大連蘇家屯間の複線工事であつたので會社は先づ是等の工事を竣成し次で安奉線改築工事に著手するの方針とした、されば安奉線改築に關する調査も亦漸次其步を進め臨時軍用鐵道監部に於て標準軌道線路として豫め測量したものに基き更に踏査を行ひ二箇年間に略々其方針を決定し起工準備を整へることが出來た然れ

鴨綠江鐵橋と流筏

ども改築の方法に至つては清國より特派する委員と特に商議する必要があつたから明治四十二年一月より公然清國に對し交渉を開き先づ鐵道線路實査の爲委員の協商を要求し其結果會社及清國政府は共に二名宛の委員を選定し同年三月奉天總督衙門で會見商議した而して各委員は其後安奉間豫定線路全部を踏査し實地に就て仔細に商議しつゝ同月下旬安東縣に到著し遂に四月上旬を以て陳相屯、奉天間約二十哩の小區間を除くの外清國委員は該線路の適當なることを認め其主旨に依り清國政府に報告をなすの運びに至つた

而して陳相屯、奉天間の線路に關しては容易に清國政府と交渉を了せず我政府は安奉鐵道改築急施の目的を達するが爲取りあへず此區間の改築問題は後日の詮議に讓り先づ清國側で異存なき陳相屯以東の工事を施工せんとし兩國委員立會踏査終了後直ちに改築の爲必要なる土地の買收に著手し度き旨を清國政府に申入れた然るに清國は徒らに言を左右に託し容易に我要求に應じなかつた爲交渉は一轉して奉天帝國總領事と東三省總督との間に移り我政府が累次清國に對し理を盡して要求に對する應諾を求めたに拘らず六月二十四日に至り漸く是が回答をなし來つた卽ち安奉鐵道の工事は單に現在の線路を改良するに止め軌道を取擴げ線路の改築をなすは許さず尙日本政府から派遣する鐵道守備兵は卽時に撤退し更に同鐵道沿線の日本警察も直ちに撤去せよといふ極めて不當な數箇の要求をなすに至つた、されど我政府は斯くの如き問題で兩國の親交を毀傷せしむることを憂ひ更に我北京駐在公使をして清國政府に是

が交渉を爲さしめたが清國政府は荏苒何等適確な回答を與へなかつたので帝國政府は已を得ず條約上の權利と日支、歐亞交通の爲に明治四十二年八月六日伊集院公使をして清國政府に對し最後の通告を爲し翌八月七日先づ福金嶺隧道及其前後土工々事に著手した

玆に至つて清國政府も帝國の善意の主張に服從するの外なく越えて十三日伊集院公使に復牒を送つて安奉鐵道改築の急務なるを認め是が爲に必要な協力をなさうとする意志のあることを表白した玆に於て帝國政府は小池奉天總領事をして東三省總督錫良及奉天省巡撫程德全と交渉せしめ同年八月十九日を以て左記の覺書に調印した

覺　書

一　軌道は京奉鐵道と同樣となすこと

二　兩國は大體に於て兩國委員が既に踏査決定せる線路を承認すること尤も陳相屯より奉天に至る線路は兩國に於て追て之を協議決定すること

三　覺書調印の當日より直ちに土地購買其他一切の細目に付協議を開始すべきこと

四　覺書調印の翌日卽前項協議の翌日より工事を進捗せしむべきこと

五　清國は沿道地方官をして工事の施行に關し諸般の便宜を與へしむること

2　改築工事　安奉線改築工事は極めて困難な工事であつたにも拘はらず其竣工期限は會社營業開始の日から滿三箇年以內で而も前述の如く日支交涉は結んで解けず漸く明治四十二年八月七日より本工事に著手したやうな狀態であつたから至く非常な苦心のもとに本工事の工程を急いだのである卽ち明治四十二年八月七日先づ福金嶺隧道及其前後土工々事に著手し直に撫安聯絡所、石橋子間(二七哩)の速成工事を起し同年十一月三日奉天、石橋子間(三五哩八鎖)奉天渾河間は本線、渾河撫安間は新聯絡線及撫順支線を經由に安奉線最初の廣軌列車運轉を開始した是より先九月中旬全線に亙り殆ど一齊に工を起し同四十三年十一月三日安東縣、鷄冠山間(五三哩三二鎖)の速成工事先づ成り越えて同四十四年一月十五日石橋子、本溪湖間(一一哩七二鎖)特別急施工事を竣工し共に廣軌列車の運轉を開始した而して鷄冠山、本溪湖間(七三哩二四鎖)に於ける所謂山間線に在つては隧道工事各所に散在し加ふるに幾多の大小河川其間に曲折してゐたので勿論工事は非常な困難を見たけれども當事者の拮据奮勵の結果何等の蹉跌なく進捗し起工以來僅か二年三箇月を以て明治四十四年十一月一日遂に全線の開通を告ぐるに至つた會社は本工事を起すに際し總豫算額金貳千四百七拾萬圓と定めたが其總決算額は工場費及撫安、奉天間改築費を除き金貳千五百貳拾萬四千四百五拾圓六拾錢八厘で豫算に對し金五拾萬四千四百五拾圓六拾錢八厘の不足を生じた此決算額は安東、陳相屯間改築哩數百五十一哩三分に對し一哩當り金拾六萬六千五百八拾五圓九拾貳錢六厘を費した割合であつた

八　複線工事　本工事も亦政府命令に依るところのものである而して本工事は廣軌改築工

事に先立ち卽ち明治四十年五月先づ大連、蘇家屯間の工事に著手し順次竣工するに從ひ區間運轉を開始し明治四十二年十月二十七日本工事は全部開通運轉を開始した

次で大正四年六月二十三日蘇家屯、奉天間の複線工事に著手し七年十一月二十日開通した更に會社は大正八年奉天、長春間の複線計畫を建て新綠は在來線の左側或は右側に併行し先づ新臺子新城子間の土工に著手し漸次進捗して大正十年十一月十五日奉天、鐵嶺間四十四哩四分の複線開通を見るに至つた次で鐵嶺以北の工事を續行し既に開通を見たるは鐵嶺開原間、昌圖滿井間及孟家屯、長春間にして右に要した總工費は他の部分的に橋梁土工等の完了せるものとを合し金七百拾萬圓であつた

蘇家屯、撫順間複線は大正十二年四月に著手し順次竣工するに從ひ區間運轉を開始し大正十四年十一月一日を以て全部開通した而して本工事は兩軌道中心間隔の點に於て電化の時を考慮し是が間隔を五米と定め軌條は百磅を使用したが工費は總額金百二十四萬五千圓を要した

安奉線蘇家屯、奧家屯間(約五哩六)複線は蘇家屯驛構內の作業能力を增大ならしめ且列車運轉の圓滑を圖るべく工費金三十二萬二千圓を投じ大正十年六月起工し十二年九月竣工同年十二月一日から開通運轉するに至つた

陳相屯、奉天間約二十哩は曩に安奉線改築に際し日淸兩國委員會に於て線路位置未確定の故を以て交涉を後日に讓つたが其後種々淸國政府と折衝の結果陳相屯より本線蘇家屯停車場に接續する事に決定し大正七年五月著手同八年十二月一日現在線の運轉を見るに至つた是が工費は金六十二萬二千五十四圓で線路延長は十哩七十九鎖二節である而して本工事完成と共に安奉線は蘇家屯驛から分岐することゝなつたので元安奉、撫順線の交叉點であつた撫安停車場から陳相屯に至る間の線路は撤廢した

ニ　停車場設備其他　引繼當時の本線停車場は建物設備共に不完全であつたので會社は漸次其新築、改築、增築又は修繕を行ひ開業當初其數僅に本線三十五、安奉線十三、其他の支線七に過ぎなかつたが四十年五月本線に先づ三十三を增設し其後も逐次增加され大正十五年十一月末に於ける停車場(信號所及聯絡所を含む)は本線九十三、安奉線二十七、其他の支線十三、合計百三十三に達した

此內奉天、四平街、長春、遼陽には大規模の停車場を新築し大連、營口、蘇家屯、撫順等に於ても亦改新築を施し貨客の輸送發著に遺憾なからしめ今日に至つた

ホ　電氣通信設備　野戰鐵道から引繼いだ當時の電柱は既に腐朽したもの多く且柱間距離一哩に約十九本の割合にて障碍頻發の狀況にあつたので會社は明治四十年末全線に亘り電柱の總建替を爲すと同時に增架線工事を施行し明治四十二年之を完成し且電信電話回線の大變更を行ひ電信回線を增すと共に單線式電話を複線式に改め或は保線專用電話回線及各主要驛間の長距離電話回線を新設し更に之に伴ふ交換所も增設した斯くの如く電線路は逐年增設改

良されて今日に至つたが之に要する電柱は大正七年度蘇家屯に防腐工場を設立し之に依り專らクレオソート注入柱を使用することゝなつた

電信は概ね單流單信法の施設にして市外電話線は大正七年度以來逐年鐵線を銅線に改め大正十年度に別に運轉專用の司令線を架設し又電氣時計は明治四十四年奉天、撫順の兩驛に之を敷設し今や主要驛全部に之を設けてある、無線設備は大正十二、十三の兩年度に於て船舶の救助、航行の安全を計る爲に無線電信裝置の船舶を備へ更に同十三年度に於て大連入港船舶の便宜を圖つて大連埠頭事務所南三山島間に無線電話の裝置をなし尙同十五年四月圓島燈臺及埠頭事務所屋上に方向探知機を裝置したが其後圓島燈臺の方向探知機は之を政府に移管した

へ　信號保安設備　開業當初には各驛共常置信號機又は轉轍器標識等の設備がなく僅に停車場構內最前方對向轉轍器に於ける手合圖を以て之に代へてゐたが明治四十年十二月より重要轉轍器に轉轍器標識を、同四十一年一月以來安奉線を除く各驛に順次場內信號機を、又同四十三年十一月から必要な驛には場內信號機に對する遠方信號機をも各設置した、第一種聯動裝置は同四十三年より順次出發信號機及入換信號機と共に敷設した

安奉線各驛に於ける常置信號機及轉轍器標識の設置は廣軌開通と同時に全部竣成した、第二種聯動裝置は大正五年に大連驛を初めとし同十年度末會社全線に對して、其施設を終つた是等の聯動機は電氣自動の色燈式信號機を使用し運轉の安全を一層確保すると共に取扱を容易にした

列車の運轉方式は大正四年度以降全線に亘り通票閉塞式を採用するに至り野戰鐵道當時から襲用せる一部の票券式は全く跡を絶ち單線運轉區間には通票閉塞機を、複線運轉區間には雙信閉塞機を各使用してゐる

然るに輸送量の激增に伴ひ列車運轉は益々頻繁となり運轉回數は逐年增加して各驛所間を一閉塞區間とする手動閉塞式に依るときは各所に多數の中間信號所を必要とし却つて經費の膨脹を來すが故に自動閉塞式採用の計畫を立て大正十三年二月から實施するに至つた、自動閉塞式採用の結果驛所間の距離に關係なく一閉塞區間の長さを任意に短縮し得て軌道の運轉容量を增大させ更に自動閉塞式施行區間內各驛構內には電氣鎖錠裝置及半自動信號機をも設置したので一層列車運轉の安全と圓滑とを期することが出來るに至つた

(二)　改　良

イ　軌道改良　軌條敷替は逐年輸送數量の激增と共に機關車の重量增大と列車回數增加の爲に在來の六十四封度、六十七封度半及八十封度軌條の折損を考慮し大正八年度から繼續事業として大連奉天間の幹線から百封度軌條敷替に著手したが十五年九月末に於ける敷替の工程は總延長一、五五六粁八(約九六八哩)の內大連長春間九二三粁八(約五九一哩)安奉線一四五粁四(約

九〇哩)撫順線四〇粁八(約二五哩)合計一、一一〇粁(約六九〇哩)である

次に枕木増設は逐年貨客輸送量の激増に伴ひ強大なる機關車竝高速度の列車運轉に備ふる爲大正九年度から繼續事業として主要線に於ける軌條一本に對する枕木配置數十四挺乃至十五挺であつたのを十八挺乃至二十一挺に増すことゝし大正十四年度迄に大連長春間及撫順、安奉線(各驛構内を除く)各線路に枕木増設を完成した

ロ　線路改良　鐵道建設の當初は經濟上竝施行時日の關係から線路勾配竝曲線半徑等は其當時に於ける事情の許す限り其地形に順應せしむるが爲各停車場區間に於て制限勾配を異にするところ多きと年々貨客の激増は列車數の増加或は長大列車の運轉を必要とするに至つたので之が改築を急務とせられ大正八年度から大連長春間の急勾配と急曲線を緩和すべく鋭意工事の進捗に努めてゐる

次に逐年貨客の増加するに從ひ強大なる車輛を運轉する爲往年露國政府の架設した連長本線竝旅順線の橋梁鐵桁は强度に於て不足せるところあり補强又は架換への爲大正十年度から列車の頻繁な大連方面より著手することゝして漸次長春方面に及ぼしてゐる

(三)保　存

イ　保線　會社線路は我國に於ける廣軌鐵道の嚆矢であつて創業當初は何等法規の依るべきものがなかつたので一定の準則を設くるの必要を認め明治四十四年軌道數設及保存心得規程なるものを制定し爾來建設及保存共總てこの規程に準據する事とした是より先明治四十二年線路檢閲規程を設け毎年四月及十月の二回に之を執行し大正二年度より毎年一回成績最優良の丁場には優勝旗を授與することゝし大に效果を擧げたるも其後大正八年度以降各事務所長が其所管内を巡檢することにしたこのほか列車振動計を用ひ全線に亘り春秋二回線路振動狀態を測定し記錄圖表を各丁場に配付し保修作業の參考に供する等常に保線の充實を圖つてゐる

ロ　道床　線路道床用碎石は沿線至る所現地採集の便を利用し全線に亘り最初道床の厚さを枕木下端十五糎(約五寸)を標準とせるも其後是が增加の必要を認め標準を三十糎(約一尺)に改め數年前から增設に著手し極めて良好の結果を收めてゐる

(四)　木材防腐場

會社に於て年々使用する枕木、電柱、坑木其他木材類の數量は莫大で就中枕木の如きは最近一箇年間に保修用のみで四十萬挺を越ゆるの狀態である而して一般木材界の需給關係より價額も漸次昂騰の趨勢を示すにより會社に於ても創業以來是が對策に腐心し種々研究調査の結果防腐劑注入により耐久年を增し取替費用を減じたると共に一方撫順炭礦及鞍山製鐵所の副産

物たるクレオソート油の利用法を講じたるは最も經濟的であり大正五年蘇家屯に本工場を開設すべく工事に著手し七年七月から作業開始の運びとなつた

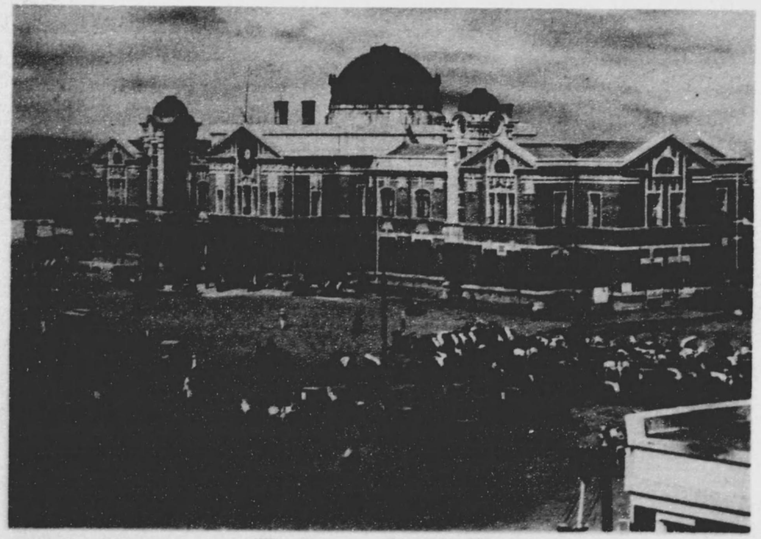
(五)　運　輸

甲　設　備

イ　停車場　停車場は開業當初其數僅に本線三十五、安奉線十三、其他の支線七、合計五十五に過ぎなかつたが明治四十年五月列車運轉時刻改正と共に本線に三十三驛を增設し大正六年四月一日に於ては本線七十、安奉線二十四、其他の支線十、合計百四を算した而して大正十五年十一月末に至つては本線九十三、安奉線二十七、其他の支線十三、合計百三十三を算し開業當時に比し二倍以上に達し今や營業と運轉とに必要とする停車場の配置は大體に於て備はつたと言つてよい本線停車場建物は開業當初野戰鐵道から引繼がれたものは概ね東淸鐵道の建築に係るもので會社創業後開設のものは全部會社の新築に成り構造大小凡そ型を定めて煉瓦建とした安奉線停車場は元總て臨時バラック建なりしも廣軌開通と同時に全部一齊に本線同樣の樣式とし煉瓦建を以て新築した

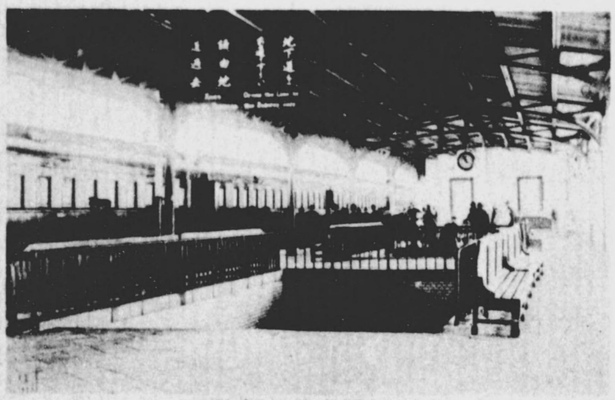
ロ　機關車庫客車庫及給水所　是等の設備も今や殆ど完備し大正十五年九月末の箇所數は機關車庫十二、客車庫三、給水所三十八を算する

驛天奉の頃年十四治明

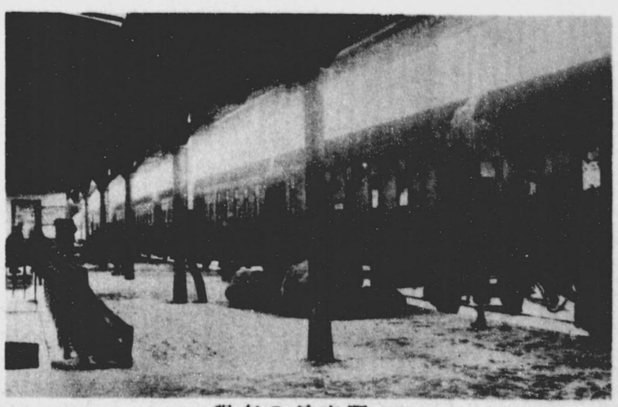


驛天奉の在現

明治四十年頃の長春驛



現在の長春驛（本社線）



現在の長春驛（東支線）

乙　車　輛

明治四十年四月會社營業開始當時野戰鐵道提理部から引繼いだ機關車々輛は本線三呎六吋ゲージの狹軌式で安奉線は二呎六吋ゲージの輕便式であつた而して其輛數は狹軌式機關車二百二十輛、客車類百五十七輛、貨車類三千八百十三輛で輕便式機關車は八十二輛、貨車類六百五十一輛であつた然るに明治四十一年五月より本線は全部四呎八吋半の廣軌に改築され更に安奉線も明治四十四年十一月廣軌々道開通するに至つた結果從來使用せる狹軌式の分は全部內地に送還し輕便式の分は其全部を會社に於て保管した

會社擴軌改築事業の計畫と共に米國へ註文した車輛は機關車二百五輛、客車類九十五輛、貨車類二千百九十輛で內貨車九百八十輛は其トラックを米國に仰ぎ車體は日本內地で製作されたものである爾來輸送物件の增加に伴ひ或は外國又は日本內地に註文し更に會社工場で製作改造をなし大正五年度末の現在數は機關車二百七十輛、客車類二百十九輛、貨車類三千百九十四輛を算し十五年九月末に於ては殆ど倍加し卽ち機關車四百二十七輛、客車類四百二十四輛、貨車類六千六百三輛を算するに至つた次に各車の變遷に就き其概要を記せば次の通りである

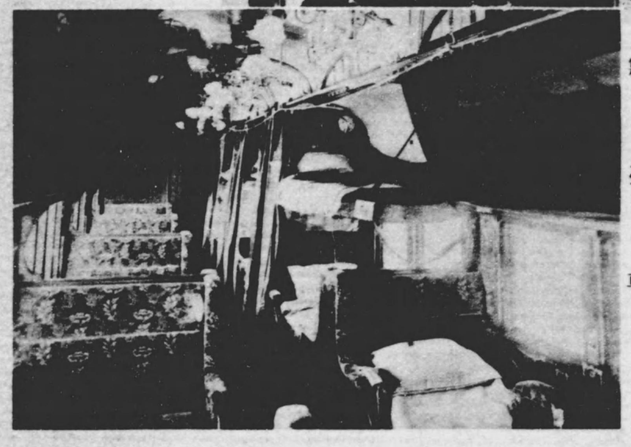
イ　機關車　野戰鐵道提理部から引繼いだ安奉線の機關車中輕便式の分は六輪聯結タンク機關車重量十三噸のもの(普通小型と稱す)五十五輛、同重量十七噸のもの(普通大型と稱す)二十七

輛を引繼ぎ引續き安奉線に使用したが同四十四年十月下旬安奉線廣軌全通に伴ひ其全部を廢止し次で狹軌式二百二十輛の內三輛を明治四十年五月京奉線引繼と同時に清國政府に讓渡し殘餘は引續き本線に使用した然るに同四十一年五月本線擴軌工事の竣工後全部を解體し政府に返還した

會社が擴軌事業の計畫を立つると共に米國に註文した廣軌機關車は二百五輛で明治四十年八月以降逐次到著し同年十二月大連、旅順から使用を開始し同四十二年六月に至つて全部の組立を完了した爾後安奉線廣軌開通竝全線輸送力增加の爲大正六年三月末に於ける機關車は總數二百七十輛を算したが十五年九月末に於ては總數四百二十七輛に達した而してこの內同年九月末現在に於ける他線貸渡機關車數は洮昂線十輛、四洮線三十輛である

ロ　客車　會社が野戰鐵道提理部から引繼を受けた際の安奉線用輕便車輛は貨車のみで客車なかりしを以て直に改造に著手し先づ明治四十年度に於て三等客車定員八人の分九輛を二噸無蓋貨車から、二等客車定員十六人の分二輛及三等客車定員二十人の分二十五輛竝手荷物緩急車四輛及郵便緩急車八輛を何れも五噸無蓋車から改裝して玆に稍輕便客車の整備を見、爾來必要に應じ增備改善をなし旅客運輸を遂行し來つたが明治四十四年十月廣軌開通するに伴ひ其全部を廢止し又狹軌客車は二等客車十五輛、三等客車百三十輛、郵便車十二輛を算したが明治四十年度初めて貴賓用として新に特等ボギー客車三輛を增備したるに止まり他は一時的改造

展望車



寢臺車

食堂車

を以て間に合せ明治四十一年五月本線擴軌工事の竣成と共に其全部を內地に送還したが其後廣軌客車を使用するに至つてよりの各種客車に就き其變遷の大要を記せば次の通りである

1　**特別車**　主として貴賓の乘用に供するもので明治四十一年度に於ては二等客車の內部を改製したもの二輛であつたが其後是等は一、二等合造客車に改造されたされど同四十二年度に於て一等客車二輛の內部を改裝し越ぇて同四十四年度に豫て英國から購入せる特別車の組立を竣成し初めて之を用ふるに至つた然るに大正元年度に至り前記一等客車の內一輛は二等寢臺車に改造せるを以て結局現在に於ける特別車は二輛を算する

2　**展望一等車**　大正十三年度沙河口工場に於て三輛製作された是は鐵骨木製モニトル型六輪ボギー車にして定員一等室三十二人展望室十二人特別室六人とし展望室車端は展望便する爲特に大なる硝子張窓を以てしてある

3　**寢臺車**　明治四十一年度には僅に三輛であつたが其後逐次新製增備し一、二等寢臺車を完備せしむるのみでなく尙最近三等寢臺車をも設けた斯くの如く沙河口工場に於ては年々改良を加へたる寢臺車作製を工夫して長途旅客の便に資せんとしてゐる

4　**食堂車**　食堂全車は初め三輛を以て漸く便し來つたが沙河口工場で明治四十四年度初めて一等食堂合造車三輛新造して以來大正二年度に食堂全車二輛を製作し引續き改新造を

第二編　會社の事業

5　**客車**　當初客車數僅に一等客車六輛、一二等合造客車十輛、二等客車十九輛、三等客車八輛に過ぎず二三等合造車の如き大正五年度に至り漸く二輛を設けられたが其後各車とも引續き最新式を應用し新製又は改造の方法を以て增備されてゐる殊に三等客車にあつては當初多く代用車を以て充てたるも沙河口工場竣成と共に著々改新造をなし室內の裝置殊に暖房設備に意を用ひ而も大正十年度には三等鋼製車を沙河口工場で新製し木造車と併用することゝした

前記擧げた外三等獨立煖房車、三等手荷物合造車、手荷物郵便合造車、手荷物車及職用車等が數へられるが大正十五年九月末の客車類總數は四百二十四輛を算する而してこの內同年九月末に於ける他線貸渡車輛は四洮鐵路局三十三輛、洮昂鐵路局四輛である

ハ　貨車　野戰鐵道提理部に於て安奉線に使用せる輕便式貨車の會社に引繼がれたものは合計六百五十一輛であつたが當時客車がなかつたので明治四十年度以降四十三年度までに內六十輛を客車に改造した尙貨車は無蓋貨車のみなりしを以て四十年度以降四十三年度までに逐次有蓋貨車に改造し四十四年十一月には六百十四輛を算したが廣軌改築と共に廢止した又狹軌貨車は合計三千八百十三輛を算せるもこの內から或は淸國政府に讓渡したるものあり結局三千七百二十七輛を明治四十一年九月から至部內地に送還した今廣軌以後の各貨車に就き其變遷の大要を記せば次の通りである

1　**有蓋貨車**　最初社外に註文した有蓋車は八百六十輛であつたが是等は明治四十一年度までに全部組立使用さるゝ事となつた然れども其後改新造せられ大正五年度末には普通有蓋貨車千二輛、馬匹車百五十輛、大豆高粱撒積車七十輛、大豆撒積專用車三十輛、其他七十九輛、合計千三百三十一輛を算するに至つた而して六年度から十年度まで千百四十二輛を沙河口工場で新造し其後益輸出入重量品輸送に適應する特別貨車の考案を企て年々新造を爲し大正十五年九月末有蓋貨車數は二千五百八輛を算する

2　**無蓋貨車**　最初社外に註文した無蓋貨車は合計一千三十輛であつたが大正五年度末には合計千百六十九輛を算し同六年度以降は專ら車型の改造に意を用ゐ更に十一年度までに別に本車千二百五十六輛を沙河口工場に於て新造し其以後に於ても約四百輛新改造をなし輸送に不便なからしむることを期した

3　**無側貨車**　最初の本車は二百輛であつたが後他車に變更されたものあり大正七年度から九年度までに百六十二輛を沙河口工場に於て新造するなど多少の變遷を經同十五年九月末の本車數は百六十三輛を算する

4　**石炭車**　大正五年度末本車數は二百十五輛であつたが同七年度以降約二百輛を新造し十五年九月末に於ける本車數は四百十四輛を算する

5　**土運車**　創業以來暫く本車の設けなくたゞ一時的に他車を改造之に充用せるが大正

三年度會社工場に於て本車四十七輛を新製し其後新改造をなすなど多少の變化ありしも同十年度には二百三十輛を算し十五年九月末に於て總數二百七十五輛となつた

6　**車掌車**　明治四十年度に於ける本車數は百輛を算したが爾來改新造するなど多少の變遷を經て大正七年度には百六十九輛に增加し同十五年九月末に於ては總數二百三十四輛を數ふるに至つた以上の外大正十五年九月末に於ける特種の貨車類を擧ぐれば卽ち非常車(一四輛)水槽車(一三輛)豆油槽車(五〇輛)石油槽車(一〇輛)冷藏車(一五輛)タール槽車(五輛)家畜車(一五輛)宿營車(三輛)鑛石車(三一輛)灰運車(一二輛)檢衡車(二輛)硫酸槽車(八輛)等百七十八輛あり是等の總數は六千六百三輛を數ふるがこの內他へ貸渡したる車輛は四洮鐵路局三百二輛、洮昂鐵路局二百四十六輛である

車輛數累年比較　各年度末現在

年度	機關車	客車類	貨車類	計
明治四十年度	七八	四五	一、一〇三	一、二二六
同　四十一年度	二〇二	一〇四	二、一八一	二、四八七
同　四十二年度	二〇五	一二三	二、二四〇	二、五六八
同　四十三年度	二二二	一三五	二、三一五	二、六七二
同　四十四年度	二五一	一五〇	二、三二三	二、七二四
大正元年度	二六一	一九一	二、九三二	三、三八四
同　二年度	二六一	一九六	三、〇三三	三、四九〇
同　三年度	二六七	一九六	三、一八六	三、六四九
同　四年度	二六七	二一三	三、一八六	三、六六六
同　五年度	二七〇	二一九	三、一九四	三、六八三
同　六年度	二七〇	二三三	三、四三三	三、九三六
同　七年度	二八七	二五四	四、一九九	四、七四〇
同　八年度	三二八	二九八	四、七九八	五、四二四
同　九年度	三四〇	三二八	五、六二四	六、二九二
同　十年度	三四七	三四九	六、〇二八	六、七二四
同　十一年度	三六六	三七三	六、一八〇	六、九一九
同　十二年度	三七七	三九一	六、二四七	七、〇一五
同　十三年度	四〇五	四〇一	六、五〇九	七、三一五
同　十四年度	四二五	四三〇	六、六四二	七、四九七
同　十五年九月末	四二七	四二四	六、六〇三	七、四五四

丙　運轉

イ　列車運轉の經過

1　**時刻改正**　列車の運轉は開業當初一時野戰鐵道制定の時刻に依りしも爾來四圍の狀

態に伴ひ殆ど毎年是が改正を行つた卽ち旅客列車は他鐵道との聯絡及主要都市の發著時刻を主眼とし其旅行區間の繁閑を考査して之を按配し又貨物列車は夫々其年に於ける最大輸送期を標準として回數を定め以て客貨輸送に些の澁滯をも來さないやうにした由來會社の貨物輸送は夏閑冬繁と云ふ跛行的狀況であつて卽ち農產物の出廻期は石炭の需要期に當り此期間に於ては最大輸送能力を發揮しても猶其不足を見るの狀態にて夏季に在つては半減されるのである又南行貨物多く北行は殆ど空車廻送なるが如く兎角繁閑の時期一方に偏してゐる關係から從來は殆ど毎年夏冬の初期に於て時刻の改正を行へるも大正十四年度より繁忙期の列車中一部を休止すれば直に閑散期の輸送狀態に應じ得るの方法を講じ冬期だけ之が改正を行ふことゝした

2　旅客列車　歐亞直通の急行旅客列車は明治四十一年十月二十八日から本線に一週二回の運轉を開始したが其後數回其運轉回數の增減を行ひ四十四年五月には一週三回とした而して同年十一月安奉線の廣軌開通と同時に滿鮮直通として先づ奉天京城間に本線の急行列車に接續する一週三回急行列車の運轉を開始し越えて四十五年六月十五日之を釜山に延長したが其後歐洲戰亂の影響を受けて漸次運轉回數を減じ遂に大正七年五月十二日より全部之が運轉を休止した然れども同十年六月から大連長春間に十五時間(一時間平均約三十三哩餘)を以て達する急行旅客列車の運轉を開始した而して同十二年七月から下關釜山間の聯絡船が高速船となつた結果鐵道省線の列車運轉時刻改正は東京釜山間に於て約三時間を短縮さるゝことゝなつたので朝鮮線及會社安奉線に於ても是に順應すべく本線列車と接續する釜山奉天間の直通急行旅客列車を設け東京奉天間の所要時間を約八時間短縮した而して同十三年夏季から大連長春間の急行旅客列車を十三時間(一時間平均三十八哩)に更に同十五年十一月から十二時間三十分に短縮した

本線の普通旅客列車は開業當初混合列車として運轉してゐたが明治四十年六月第一回時刻改正以後初めて旅客列車として運轉し廣軌改築後は大體に於て大連長春間二及營口長春間一往復を主要なるものとし外に若干の貨物列車に短區間客車を連結したものを配置した安奉線は輕便の末期迄線路の狀態から夜間運轉を避け安東、奉天間直通の混合列車は中間草河口驛で一夜停車することゝした然るに廣軌開通後は全然面目を一新して全線八時間に短縮し直通二往復の運轉をなし而も朝鮮鐵道及本線旅客列車に接續させ外に區間混合列車各一を運轉させた

斯くて大正八年二月には大連長春間に旅客列車一往復を增し又旅順、營口、撫順の各線は當初から概ね混合列車のみを運轉してゐたが旅順線は同年十二月から旅客列車と爲し旅大間各一往復の高速度急行旅客列車を出し兩地間を接近せしめた尙同十四年十一月から大連長春間に夜間は中間小驛を通過して其速度を高め以て從來より二時間乃至三時間を短縮したる十七時

間半の急行列車の運轉を加へた

3　貨物列車　貨物列車は逐年增加する出貨に適應すべく列車回數を定め牽引力の增大及運轉時間の短縮等苟も輸送の敏活擴大の施設に就ては全力を傾注してゐる最近數年間に於ける列車回數には大なる差異を見ず寧ろ或區間の如きは減少を示すもこれ輸送數量の減退でなく輸送方法の緩急調節宜しきを得るに至つた現象で實質に於ては強大な機關車の配置竝線路の改良工事竣成等に依り其輸送量は順次增加を來してゐる卽ち大正五年頃に於ける機關車一日の走行粁は二萬二千七百四十粁約一四、一九九哩停車場構內の一日總仕業時間は五百六十一時間であつたが大正十四年度には實に三萬八千七百餘粁約二四、〇〇〇哩、六百三十五時間を算するに至つた

尙輸送方法の改善に就ては常に考究してゐるが特に輸送の敏活を圖る方法として殆ど中間驛を通過せしめて時間を短縮し其他組成驛に於ても取扱時間等は極度に短縮し其實績を擧げてゐる

4　運轉規程及列車運轉整理　運轉に關する規程は開業當初から主として明治三十三年遞信省令鐵道運轉規程を準用し必要に應じ單行規程を設けて支障なきを期したが漸次幾多の不利不便を感ずるに至つたので會社鐵道に適當する根本的規定の實行を企て先年來委員を設けて是が審議を重ねたるが最近漸く完成して昭和二年四月之を發表すべく監督官廳に認可申請中である

列車運轉の整理は當初大連、遼陽、公主嶺、安東の各運輸事務所に於て分擔してゐたが其後數回の變遷を經て大正九年七月大連、奉天、長春に運輸事務所を設け之を分擔し十二年五月安東鐵道事務所を創設し一時蘇家屯安東間及朝鮮線の一部を分擔せしめた然るに十四年四月同所の廢止と共に又前記三事務所の分擔となり漸次諸設備の改善と相俟つて簡易迅速を期するに至つた

5　標準時の變更　會社の標準時刻は當初日本內地中央標準時に據つたが明治四十年五月十六日午前零時を期し本邦西部標準時に據ることに變更して從前の時刻から一時間後るゝことゝなつた尙朝鮮鐵道の標準時刻は元內地中央標準時と西部標準時との中間に介在し其執れにも三十分を前後したが明治四十五年一月一日から中央標準時に據ることに變更したので會社標準時とは一時間の差異を見ることゝなつた

ロ　運轉成績

1　機關車運轉成績　廣軌、狹軌、輕便の混合仕業時代は姑く措き全線が廣軌運轉となつた大正元年度以降に就て機關車運轉作業狀況を觀るに各前年比較に於て僅々一二年作業減退を來せるのみで大體に於て逐年增加の趨勢である今運轉作業量の尺度たる機關車走行粁及牽引

換算車輛走行粁に就て遂年發展の度を觀るに卽ち機關車走行粁は大正元年度に於て七百八十萬五千五百四十四粁一(約四八四萬哩)であつたが同五年度に於ては九百十四萬七千三百四十三粁九(約五六七萬哩)更に十年度には千三百八十二萬八千三百八十一粁二(約八六〇萬哩)となり十四年度末に於ては千五百六十六萬三千八百九十二粁一(約九七一萬哩)を算し之を元年度に比すれば正に一〇〇%の增率を示し又牽引換算車輛走行粁は元年度に於て八千七百五十五萬四千五百七十九粁一(約五四二八萬哩)であつたが十年度には二億二百七十六萬七千六十五粁四(約一二五七〇萬哩)を算し而も十四年度に於ては二億六千四百八十一萬二千八百五十七粁(約一六四二〇萬哩)といふ異常なる數字を示し元年度に比すれば實に二〇二%の增加を表してゐるのである而も牽引換算車輛走行粁の增加率が機關車走行粁のそれよりも遙に高位にあるは機關車作業能力の增大を證して更に其效率を觀るに機關車平均牽引換算車數は元年度に於て一一·二車であつたが十四年度は一六·九車卽ち五一%の大なる增加率を示してゐる、以上の事實は云ふまでもなく運轉作業費を勘からず經濟的にし且圓滑な輸送の實行を物語つてゐるものである

又轉じて運轉用消耗品の消費量を觀る時は非常な增加を示し卽ち大正元年度に於ては機關車運轉用石炭消費量は約十九萬噸弱價格約百萬圓であつたが同十四年度に於ては約四十八萬噸價格五百萬圓餘を要するに至り其他の消耗品に於ても大正元年度に於て價格約五萬圓を算したるに同十四年度に於ては約二十萬圓を要するに至つた斯くの如きは運轉作業量の增加に基く當然の結果である次に機關車の生產的作業單位である牽引換算車輛走行一粁當消耗品消費割合を觀るに大正元年度に於ける石炭は二瓩一五三(約三,五斤)であつたが同十四年度に於ける石炭消費割合は一瓩八〇三(約三斤)といふ數を示すに至つたことは勿論成績の向上を物語るものである

2　列車運轉成績　列車運轉に於て其仕業は大部分貨物輸送であつて列車及車輛運轉の客貨割合は列車に於て旅客三〇%貨物七〇%で車輛運轉に於ては客車一一%貨車八九%の比率を示してゐる而して作業の消長を觀るに大正元年度の列車走行粁六百八十八萬千八百八十八粁約四二六萬哩に對し同十四年度に至つては千三百十九萬六千五百六粁(約八一八萬哩)を算し元年度に比し九二%の增率を示し更に車輛走行粁は元年度に於て一億一千四百九十一萬六千九百一〇粁(約七一二六萬哩)であつたが十四年度には三億二千八百二萬九千四百八十一粁(約二〇四六〇萬哩)を算し是亦實に一八一%の著しき增加を示した次に運轉成績を列車別に就て觀るに旅客列車は歐洲戰亂の影響を蒙り大正三年度から同七年度迄列車運轉回數を減じたが同八年度以降は旅客劇增して其結果列車及客車の走行粁も著しく增加した卽ち十四年度の是等走行粁を元年度に比すれば旅客列車走行粁は七四%客車走行粁は一〇九%といふ著しき增率を示した

又貨物列車の運轉作業を觀るに一二減退の年度ありたるも大體に於て年々盛況を呈してゐ